

## 『矛盾の話し』（稿）

—— 毛沢東『矛盾論』の翻訳 ——

や ぶき すすむ  
矢 吹 晋

訳者 まえがき

1. 本稿は毛沢東『矛盾論』の新訳である。
2. 既訳との異同は注に示した。既訳を500枚近くのカードに整理する作業は稲垣清氏にお願いした。
3. 訳文の句点・段落は原文のそれに対応する。原文の同じ中国語には、なるべく同じ日本語をあてようと努力したが、まだ不十分である。原注はまだ訳していない。
4. 訳文は簡潔を旨とした。注ぬきで400字詰め原稿用紙75枚である。ちなみに松村一人・竹内実訳100枚、竹内好訳85枚、毛沢東の原文50枚である。
5. この拙訳がまだまだ不十分なものであることは訳者自身痛感している。〈稿〉と名づけるゆえんである。当初の計画では、これをタタキ台として友人諸氏の知恵を借りて検討を加え、共同作業として発表する予定であったが、訳者の東南アジア留学を控えて時間を見出せなかった。読者のご容赦を乞う。
6. もしこの仕事になんらかのメリットがあるとするれば、それはすべて研究所の同僚（ここでは特に清水登氏の名を記すに止めたい。氏は全体を通読のうえ、いくつかの誤り・欠点を指摘してくれた。しかしわたくしの納得できない箇所は当然のことながら改めなかった）・東大教養学部中国語研究室内外の友人諸氏の知恵および稲垣氏の努力に負うものであり、欠点はすべて訳者のものである。

## &lt;目次&gt;

- I 二つの世界観
- II 矛盾の普遍性
- III 矛盾の特殊性
- IV 主要矛盾と主要矛盾の側面
- V 矛盾する諸側面の同一性と闘争性
- VI 矛盾における敵対の位置
- VII 結 び

物事(1)の矛盾の法則、すなわち対立と統一(2)の法則は、唯物弁証法のいちばん根本の(3)法則である。レーニンはいう、「本来の意義からいえば弁証法とは、対象の本質がもつ矛盾を研究することである」。レーニンはこの法則をよく弁証法の本質・弁証法のコアとよんだ。だからこの法則を研究するには、広い範囲・多くの哲学問題にわたらなければならない。もし次の問題がすべてはっきりすれば、唯物弁証法が根本からわかった(4)ことになる。その問題とは、二つの世界観・矛盾の普遍性・矛盾の特殊性・主要矛盾と主要矛盾の側面(5)・矛盾する諸側面の同一性と闘争性・矛盾における敵対の位置である。

ソ連の哲学界でこの数年デボーリン学派の観念論が批判されたが、このことはわれわれに大きな興味(6)をよびおこした。デボーリンの観念論は中国共産党に悪い影響(6)を生んでおり、わが党内の教条主義思想がこの学派の作風(7)と無関係とはいえない。だからこれから(8)の哲学の研究仕事は、教条主義思想の掃蕩をおもな目標にしなければならない。

## I 二つの世界観(9)

人類の認識史には世界の発展法則についての二つの見解・形而上学の見解と弁証法の見解があり、たがいに対立しあう二つの世界観(9)を形づくってきた。レーニンはいう、「発展(進化)についての二つの基本的(二つの可能な? 歴史上みられる二つの?) 観点は、(1)発展は増減・反復であると考え、(2)発展は対立と統一(統一物(10)が二つのたがいに排斥しあう対立からなり・対立はたがいに関連しあっている(11))であると考え、の二つである。レーニンのいうのはこの二つの異なる世界観のことである。

形而上学は、玄学ともいう。この思想は中国でもヨーロッパでも、長い歴史にわたって観念論の(12)世界観に

属し、人々の思想において支配的位置を占めてきた。ヨーロッパでは、ブルジョア階級の・初期の(13)唯物論も形而上学的であった。ヨーロッパの多くの国の社会経済情況(14)が資本主義の高い発展段階に達し、生産力・階級闘争・科学が史上かつてない水準に達し、工業プロレタリア階級が歴史を進展させる最大の動力になって、マルクス主義の・唯物弁証法の(15)世界観が生まれた。そこでブルジョア階級のあいだに、公然たる・きわめて露骨な・反動的観念論のほかに、俗流進化論が現われ、唯物弁証法に敵対(16)するようになった。

形而上学の・俗流進化論の世界観というのは、孤立した・静止した・一面的な観点から世界をみる。この世界観は世界のすべての(17)物事・すべての物事のかたち(18)と種類を、永遠に孤立した・変化しないものとみなす。変化するとしても、数(19)の増減・場の変更(20)にすぎない。この増減と変更の原因は、物事の内にでなく外にある、すなわち外力によっておし進められるとみる。形而上学者は考える、世界のそれぞれの(21)異なる物事・物事の特徴は、存在しはじめたときからそうである。あとの変化は数の拡大・縮小にすぎない、と。ある物事は永遠に同じ物事を生むことをくり返すだけで、別の異なる物事には変化しえない、とかれらは考える。形而上学者によれば、資本主義の搾取・競争・個人主義思想(22)などは、古代の奴隷社会いや原始社会にさえ探しだせるし、将来も永遠に変わらず存在していく。社会発展の原因になると、社会にとって外的な地理・気候などの条件から説明する。かれらは単純にも物事の外に発展の原因を探し、唯物弁証法という・物事は内部矛盾によって発展するという学説を否定する。だから物事の質が多様であること、ある質が他の質に変わるという現象を解釈できない。この(23)思想はヨーロッパでは、17～18世紀には機械的唯物論として、19世紀末～20世紀初めには俗流進化論として現われた。中国では「天も不変であり、道も不変である(24)」という形而上学の(25)思想が、長らく腐朽した封建支配階級に守られてきた。この百年、ヨーロッパの機械的唯物論・俗流進化論が輸入されるや、ブルジョア階級に守られてきた。

形而上学の(26)世界観とは相反(27)する唯物弁証法の(28)世界観は、物事の内部から・ある物事の他の物事に対する関係から・物事の発展を研究せよと主張する、すなわち物事の発展は物事の内なる必然的自己運動であるのみなし・ひとつひとつの(29)物事の動きはみなそのまわりの他の物事とたがいにつながり(30)・影響しあっている

るとみなす。物事の発展の根本原因は、物事の外ではなく内に、物事の内なる矛盾性にある。どんな(31)物事の内にもこの(32)矛盾性があるから、物事の動き(33)と発展を引き起こす。物事の内なるこの(34)矛盾性が物事の発展の根本原因であり、ある物事と他の物事がたがいにつながり(35)・影響しあうことが発展の第2の原因である。このように唯物弁証法は、形而上学の機械的唯物論・俗流進化論がいう外因論・他動論に強く反対する。単なる外因は物事の機械的動き、すなわち範囲の大小・数の増減を引き起こしうるだけで、物事の性質がなぜ千差万別であり、たがいに変化しあうのかを説明しえないことははっきりしている。実は外力による機械的動きでさえ、物事の内なる矛盾性を通じなければならない。植物や動物が育ち・数がふえる(36)のも、主として内部矛盾によって引き起こされる。同じく社会の発展も、主として外因でなく内因による。多くの国は地理・気候がほとんど同じでも、その発展のちがいが・不均衡(37)は非常に大きい。一つの国で地理・気候が変化しない情況(38)でも、社会の変化は大きい。帝国主義ロシアは社会主義ソ連に変わり、封建的鎖国日本は帝国主義日本に変わったが、これらの国の地理・気候が変化したからではない。長らく封建制度に支配された中国は、この百年大きな変化が生じ、いまや自由な・解放された新中国に変化しつつあるが、中国の地理・気候が変化するからではない。地球全体・地球の各部分も変化しつつあるが、その変化は社会の変化と比べるとごくわずかで、前者が数万年の単位で現われる変化は、後者は数千年・数百年・数十年いな数年・数カ月(革命のとき)のうちに現われる。唯物弁証法の観点によれば、自然界の変化は主として自然界の内なる矛盾の発展による。社会の変化は主として社会の内なる矛盾の発展、すなわち生産力と生産関係の矛盾・階級間の矛盾・新旧間の矛盾の発展によるのであり、これによって社会の前進・新旧社会の交代がおしすすめられる。唯物弁証法は外因を排除するのか？ 排除はしない。唯物弁証法は、外因は変化の条件・内因は変化の根拠・外因は内因を通じて作用すると考える。鶏卵は適当な温度でひよこに変化するが、温度は石をひよこに変ええない、両者の根拠が異なるからである。各国人民がたがいに影響しあうことはいつも存在する。資本主義の時代、とりわけ帝国主義とプロレタリア革命の時代には、各国は政治的・経済的・文化的にたがいに影響し・激動しあうが、これはきわめて大きい(39)。十月社会主義革命はロシア史だけでなく世界史にも新紀元を開き、世界各国の内な

る変化に影響したが、中国の内なる変化への影響はとくに深い<sup>(40)</sup>、この<sup>(41)</sup>変化は各国の内なる・中国の内なる法則性を通じて起こったのである。両軍が戦えば、一方が勝ち・他方が負けるが、勝敗はみな内因による。一方は強いか・指揮が正しいから勝ち、他方は弱いか・指揮がまずいから負けるのであって、外因は内因を通じて作用する。1927年に中国の大ブルジョア階級がプロレタリア階級を敗北させたのは、中国プロレタリア階級の内なる（中国共産党の内なる）日和見主義を通じて作用したのである。この<sup>(42)</sup>日和見主義を清算するや、中国革命は新たに発展した。その後中国革命が敵から重大な打撃をまた受けたのは、わが党内に冒険主義が生まれたからである。この冒険主義を清算するや、われわれの事業はまた新たに発展した。したがって<sup>(43)</sup>ある政党が革命を勝利させるには、その政治路線の正しさ・組織のかたさに頼らなければならない。

弁証法の<sup>(44)</sup>世界観は、中国でも・ヨーロッパでも古代に生まれている。古代の弁証法は自然発生の・素朴なもの<sup>(45)</sup>で、当時の社会的・歴史的条件のためまだ整った理論となりえず、世界を完全に解釈できなかったの、のちに形而上学に代わった。18世紀末から19世紀初めのドイツの有名な哲学者ヘーゲルは、弁証法に重要な貢献をしたが、その弁証法は観念弁証法<sup>(46)</sup>であった。プロレタリア運動の偉大な活動家マルクス・エンゲルスは、人類の認識史の成果<sup>(47)</sup>を総合し・とくにヘーゲル弁証法の合理的な部分を批判的に吸収し、弁証唯物論<sup>(48)</sup>・史的唯物論という偉大な理論をつくったが、これによってこそ人類の認識史に空前の大革命が起こった。のちにレーニン・スターリンを経て、この偉大な理論はさらに発展した。この理論が中国に伝わるや、思想界に大きな変化を引き起こした。

この弁証法の世界観は次のことにたくみでなければならぬと教えている、それぞれの<sup>(49)</sup>物事の矛盾の動きを観察し・分析し、この分析に基づき矛盾の解決方法を示すこと。だから物事の矛盾という法則を具体的に理解<sup>(50)</sup>することが非常に重要である。

## II 矛盾の普遍性

叙述に便利なように、ここではまず矛盾の普遍性について話し、次に矛盾の特殊性を話そう。矛盾の普遍性の問題はほんの少し話せば明らかになる、というのはマルクス主義の偉大な創造者・継承者マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンが唯物弁証法の世界観を発見し、

これを人類史の分析・自然史の分析に応用し、社会の変革・自然の変革（たとえばソ連のように）に応用し、きわめて偉大な成功を収めたので矛盾の普遍性はすでに多くの人々に承認されているのだから、ところが矛盾の特殊性の問題は多くの同志とくに教条主義者がまだはっきりわかっていない。かれらは矛盾の普遍性が矛盾の特殊性のうちにひそむことを理解しない。当面の具体的な物事の矛盾の特殊性を研究することが、革命の発展の発展を指導<sup>(51)</sup>するうえでどの程度重要な意義をもっているのかも理解しない。だから矛盾の特殊性の問題は、重点的に研究し・十分な紙幅で説明しなければならない。こういうわけで<sup>(52)</sup>いま物事の矛盾の法則を分析するにあたり、まず矛盾の普遍性を分析し・それから矛盾の特殊性の問題を重点的に分析し・最後にまた矛盾の普遍性の問題に帰る。

矛盾の普遍性・絶対性という問題には二つの意義がある。一つは矛盾がすべての<sup>(53)</sup>物事の発展過程に存在することで、もう一つはひとつひとつの<sup>(54)</sup>物事の発展過程には初めから終わりまで、矛盾の動きが存在することだ。

エンゲルスはいう、「動きそのものが矛盾<sup>(55)</sup>である」。レーニンは対立と統一<sup>(56)</sup>の法則を定義している、それは「自然界の（精神・社会も含めて）すべての<sup>(57)</sup>現象・過程が、たがいに矛盾し・排斥し・対立しあう傾向をもつことを承認（発見）すること」であると。これらの意見<sup>(58)</sup>は正しいか？ 正しい。すべての物事に含まれる矛盾する側面<sup>(59)</sup>の相互依存・相互闘争<sup>(60)</sup>が、すべての物事の生命を決め・発展をおしすすめる。どんな物事も必ず矛盾を含んでおり、矛盾がなければ世界がない。

単純な動きかた<sup>(61)</sup>（たとえば機械的な動き<sup>(62)</sup>）さえ矛盾を基礎としているのだから、複雑な動きかたはなおさらそうである。

エンゲルスは矛盾の普遍性をこう説明した、「単純な機械の動き<sup>(63)</sup>さえもが矛盾を含んでいるとするならば、もの<sup>(335)</sup>のより高度な動きかた・とくに有機体である生命<sup>(64)</sup>とその発展とは、なおさら矛盾を含んでいる。……生命についてまずいえることは、生物がひとつひとつの<sup>(65)</sup>瞬間にそれ自身でありながら、同時に別のなにものかである、ということ。だから生命もモノ<sup>(66)</sup>とその過程そのものの中に存在し・たえず生まれ出で<sup>(67)</sup>・自ら解決がついていく矛盾なのであって、この矛盾がなくなるや、生命もなくなり・死がやってくる。同じく思惟の領域でも矛盾は避けられない、たとえば人間<sup>(68)</sup>の内なる限り

ない(69)認識能力と、この認識能力が外的に限られ(70)・認識そのものにも限りがある・人々(71)の認識の現実のありかたとの矛盾は、人類(72)史の無限(73)の連続(少なくともわれわれにとっては事実上無限の)・無限の前への動きのなかで解決されるのである」と。

「高等数学のおもな基礎の一つは、矛盾である……」

「初等数学でさえ、矛盾に満ちている。……」

レーニンも矛盾の普遍性をこう説明している、「数学ではプラス・マイナス、微分・積分。

力学では作用・反作用。

物理学では陽電気・陰電気。

化学では原子の化合・分解。

社会科学では階級闘争」。

戦争の攻守・進退・勝敗は、みな矛盾している(74)現象である。片方をなくせば、もう片方もなくなる。双方は闘争しつつ・結びつき(75)、戦争の全体を形づくり(76)、戦争の発展をおすすすめ、戦争の問題を解決する。

人間の概念のひとつひとつの(77)ちがい(78)は、みな客観の矛盾(79)の反映とみなすべきである。客観の矛盾が主観の思想(80)に反映し、概念の矛盾の動きを形づくり、思想の発展をおすすすめ、人々の思想の問題をたえず解決する。

党内の異なる思想の対立・闘争はいつも生まれている、これは社会の階級矛盾・新旧の物事の矛盾の党内への反映である。党内にもし矛盾・矛盾を解決する思想闘争がないなら、党の生命もなくなる。

したがって(81)、単純な動きかたであれ複雑な動きかたであれ・客観の現象(82)であれ思想の現象(83)であれ、矛盾が普遍的に・すべての過程に存在することはもうはっきりした。ではひとつひとつの過程の初めの段階にも矛盾は存在するだろうか？ ひとつひとつの物事の発展過程には初めから終わりまで矛盾の動きがあるのだろうか？

ソ連の哲学界でデボーリン学派を批判した論文から、かれらがこういう見解をもっていることを見ぬける、矛盾は過程がはじまるや現われるのではなく・過程がある段階まで発展して初めて現われる、と考えていることが。となるとその前は、過程が発展する原因は内因ではなく外因であることになる。こうしてデボーリンは、形而上学の外因論・機械論にかえていった。この(84)見解から具体的問題を分析し、ソ連の条件のもとで富農と一般農民にはちがいはあるが矛盾はないとして、ブハーリンの意見に全く同意した。フランス革命の分析で、革

命前の、労働者・農民・ブルジョアジーからなる第三階級にも、ちがいはあるが矛盾はない、とかれらは考える。デボーリン学派のこういう(85)見解はマルクス主義に反する。世界のひとつひとつのちがいが矛盾を含んでいること、このちがいがこそ矛盾であることをかれらは知らない。労資間は、両階級が生まれたときからたがいに矛盾しあっているのであって、激化していないだけである。労農間にはソ連社会でもちがいがあり・そのちがいがこそ矛盾である、敵対まで激化しえず・階級闘争のかたち(86)をとらぬ点が労資間の矛盾と異なるだけである、かれらは社会主義建設においてかたい同盟を形づくり・社会主義から共産主義へと発展する過程でこの矛盾をしいだいに解決する。これは矛盾のちがい(87)の問題であって、矛盾の有無の問題ではない。矛盾は普遍的・絶対的であり、物事の発展のすべての過程に存在し、すべての過程を初めから終わりまで貫く。

新しい過程が生まれるとはどういうことか？ 古い統一とその統一をなす対立する要素とが新しい統一とその統一をなす対立する要素とに席をゆずり、新しい過程が古い過程に代わって生まれることである。古い過程が終わって、新しい過程が生まれる。新しい過程にも新しい矛盾が含まれていて、矛盾の発展史が始まる。

マルクスは『資本論』で、物事の発展過程を貫く矛盾の動きを模範的に分析しているとレーニンが指摘している。これはどんな(88)物事の発展過程を研究するにも応用すべき方法である。レーニン自身もそれを正しく応用し、その全著作のなかで貫いている。

「マルクスが『資本論』でまず分析するのは、ブルジョア社会(商品社会)の、もっとも単純な・普通な(89)・基本的な(90)・よくみられる(91)・日常的な(92)・何億回も出あう関係——商品交換である。この分析はこのもっとも単純な現象(ブルジョア社会の「細胞」)のうちに、現代社会のすべての矛盾(およびその萌芽)をあばきだす。以下の叙述は、これらの矛盾およびこの社会の各部分の総和の・初めから終わりまでの発展(成長と動き)を明らかにしている」。

レーニンはこういったあと続けていう、「これが弁証法一般を……叙述(および研究)する方法でなければならぬ」。

中国共産党員はこの方法を身につけ(93)なければならず、そうしてこそ中国革命の歴史と現状を正しく分析し・革命の将来を推定しうる。

### III 矛盾の特殊性

矛盾はすべての(94)物事の発展過程に存在し・ひとつひとつの(95)物事の発展過程を初めから終わりまで貫くこと、これが矛盾の普遍性・絶対性であることはまえに話した。これから(96)矛盾の特殊性・相対性を話そう。

この問題は、いくつかの情況(97)に分けて研究すべきである。

まずそれぞれのものの動きかた(98)のなかの矛盾は、みな特殊性をもっている。人間がものを認識するとは、ものの動きかたを認識することである、なぜなら世界には動くものしかなく・ものの動きはかならず一定のかたちをとるのだから。もののひとつひとつの動きかた(99)については、それとその他の(100)動きかたとの共通点に注意しなければならない。だがとりわけ重要なこと・物事の認識の基礎となるのは、その特殊点(101)に注意しなければならないことだ、つまりそれとその他の動きかたとの質の区別(102)に注意することである。この点に注意してこそ、物事は区別しうる。どんな(103)動きかたもその内にそれ自身の特殊な矛盾を含んでいる。この(104)特殊な矛盾が、ある物事をほかの物事から区別する特殊な本質をなす。これこそ世界のいろいろな(105)物事が千差万別であることの内なる原因あるいは根拠である。自然界には多くの動きかたが存在する、機械の動き・音がすること・光ること・熱のであること・電気の流れ(106)・分解・化合、などはみなそうである。これらのものの動きかたはすべて(107)が、みなたがいに依存しつつ・本質的にはたがいに区別しあう。ひとつひとつのものの動きかた(108)がもつ特殊な本質は、それ自身の特殊な矛盾によって規定される。この情況(109)は自然界に存在しているだけでなく、社会現象・思想現象にも同じく存在している。ひとつひとつの(110)社会のかたち・思想のかたち(111)は、みなその特殊な矛盾・特殊な本質をもつ。

科学の研究は、科学の対象がもつ特殊な矛盾性を根拠に区分される。だからある(112)現象の領域に特有なある(113)矛盾の研究が、科学のある部門(114)の対象を構成する。たとえば、数学の正数と負数・機械学の作用と反作用・物理学の陰電気と陽電気・化学の分解と化合・社会科学の生産力と生産関係・階級と階級との闘争・軍事学の攻めと守り・哲学の観念論と唯物論・形而上学の観点と弁証法の観点、などはみな特殊な矛盾・特殊な本質をもつので、異なる科学の研究の対象を構成する。もちろん矛盾の普遍性を認識しなければ、物事の動きが発展す

る普遍的な原因や根拠を発見しようがなく、矛盾の特殊性を研究しなければ、ある物事(115)がほかの物事(116)と異なる特殊な本質を確定しようがなく・物事の動きが発展する特殊な原因や根拠を発見しようがなく・物事を見わけようがなく・科学の研究の領域を区分しようがない。

人類の認識の動きの順序(117)についていうと、いつも個別の・特殊な物事の認識から、しだいに一般の物事の認識へと拡大するのである。人々はいつもまず多くの異なる物事の特殊な本質を認識し、それからより一歩進んで概括し・いろいろな(118)物事の共通の本質を認識するのである。この共通の本質を認識し・この認識を導きとして、まだ研究されていないか・深くは研究されていない、それぞれの(119)具体的な物事を続けて研究し・その特殊な本質を探しだす、こうしてこそ共通の本質への認識を補い・豊かにし・発展させようし、その認識がひからびた・こわばったものにならないようにしうる。これは認識の二つの過程であり、一つは特殊から一般へ・もう一つは一般から特殊へ、である。人類の認識はいつもこのように循環往復的に進むのであり、ひとつひとつの循環が(科学の方法(120)にきびしく従うかぎり)人類の認識を一步一步高め・たえず深める。わが教条主義者のこの問題についての誤りは次の二つ、一方では矛盾の特殊性を研究し・それぞれの(121)物事の特殊な本質を認識してこそ、矛盾の普遍性・いろいろな(122)物事の共通の本質を十分に認識しうるのが、わからないことであり、他方では物事の共通の本質を認識したのちも、まだ深くは研究されていないか・出てきたばかりの具体的な物事を続けて研究しなければならないのがわからないことである。わが教条主義者はなまけもので、具体的な物事の苦しい研究はどれもこぼみ、真理一般が天からふつてくるとみなし、真理をつかまえどころのない純粹に抽象的な公式に変えてしまい、人類が真理を認識する正しい順序を全く否定し転倒させてしまう。かれらは人類の認識の二つの過程がたかひに結びあうこと——特殊から一般へ・一般から特殊へ——もわからず、マルクス主義の認識論が全くわからない。

ひとつひとつの大系をなすものの動きかたの特殊な矛盾性(123)とそれに規定される本質を研究しなければならないだけでなく、ひとつひとつのものの動きかた(124)の・長い発展過程(125)における・ひとつひとつの段階(126)の特殊な矛盾とその本質をも研究しなければならない。すべての(127)動きかたの・ひとつひとつの(128)実在の(臆測でない(129))発展過程は、みな異質である。われわ

れの研究工作是ここに重点をおき、ここから始めなければならぬ。

異質の矛盾は、異質の方法によってのみ解決できる。たとえば、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾は社会主義革命の方法で解決され、人民大衆と封建制度との矛盾は民主主義革命の方法で解決され、植民地と帝国主義との矛盾は民族革命の方法で解決され、社会主義社会の労働者階級と農民階級との矛盾は農業の集団化・機械化の方法で解決され、共産党内の矛盾は批判・自己批判の方法で解決され、社会と自然の矛盾は生産力を発展させる方法で解決される<sup>(130)</sup>。過程が変化すれば、つまり古い過程・古い矛盾がなくなり、新しい過程・新しい矛盾が生まれれば、矛盾を解決する方法も異なってくる。ロシアの2月革命と10月革命では、解決された矛盾・矛盾の解決に用いた方法が根本から異なる。異なる方法で異なる矛盾を解決すること、これはマルクス・レーニン主義者が、きびしく守らなければならない原則である。教条主義者はこの原則を守らない、いろいろな<sup>(131)</sup>革命情況の区別を理解せず、異なる矛盾は異なる方法で解決すべきことも理解しないので、変えてはならぬ公式なるものを拘子定規のようにあてはめるだけ、これでは革命をそこなうか・うまくいった事柄<sup>(132)</sup>もぶちこわすだけである<sup>(133)</sup>。

物事の発展過程の矛盾がその総体<sup>(134)</sup>において、相互の結びつき<sup>(135)</sup>においてもつ特殊性をあげくためには、つまり物事の発展過程の本質をあげくためには、矛盾する各側面<sup>(136)</sup>の特殊性をあげかなければならぬ、さもないと本質をあげくことができぬ、これも研究工作中にあたって十分注意しなければならない<sup>(137)</sup>。

大きな物事は、その発展過程に多くの矛盾を含んでいる。たとえば中国のブルジョア民主主義革命の過程には中国社会の抑圧されている各階級<sup>(138)</sup>と帝国主義との矛盾・人民大衆と封建制度との矛盾・プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾・農民や都市のプチブルジョア階級とブルジョア階級との矛盾・各反動支配集団<sup>(139)</sup>間の矛盾などがあり、情況は非常に複雑である。これらの矛盾は、それぞれ<sup>(140)</sup>特殊性をもつから一律には扱えないだけでなく、ひとつひとつの<sup>(141)</sup>矛盾する両側面もそれぞれ特徴があるから、一律には扱えない。われわれ中国革命にたざさわるものは、それぞれの<sup>(142)</sup>矛盾は総体<sup>(143)</sup>において、すなわち相互の結びつき<sup>(144)</sup>において特殊性を理解しなければならないだけでなく、矛盾する各<sup>(145)</sup>側面の研究にとりかかってこそその全体を理解しうること

になる。矛盾する各側面を理解するとは、ひとつひとつの<sup>(146)</sup>側面がそれぞれ<sup>(147)</sup>なんらかの決まった位置を占めそれぞれがなんらかの具体的なかたちでたがいに依存・矛盾しあう関係をもち、依存・矛盾においてまた依存が破れてから、それぞれがなんらかの具体的方法で相手と闘争しあうこと、を理解することである。これらの問題を研究することはたいへん重要な事柄<sup>(148)</sup>である。レーニンが、マルクス主義のいちばん本質的なもの・マルクス主義の生きた魂は、具体的情況の具体的分析にあるといったのは、この意味だ。わが教条主義者はレーニンの指示にそむき、どんな<sup>(149)</sup>物事でも頭を使って具体的に分析することをせず、文章を書き演説するといつも無内容な八股調であり、党内に悪い作風<sup>(150)</sup>を作り出した。

問題を研究するには、主観的・一面的・表面的<sup>(151)</sup>であってはならない。主観的というのは、問題を客観的にみることを知らず、唯物論の観点<sup>(152)</sup>でみることを知らないことである。この点は『実践論』ですでに話した。一面的というのは、問題を全面的にみることを知らないことである。たとえば、中国は理解するが日本は理解しない・共産党は理解するが国民党は理解しない・プロレタリア階級は理解するがブルジョア階級は理解しない・農民は理解するが地主は理解しない・順調な情況は理解するが困難な情況は理解しない・過去は理解するが将来は理解しない・個別は理解するが全体は理解しない・欠点は理解するが成果は理解しない・原告は理解するが被告は理解しない・革命の地下活動は理解するが公然活動は理解しない、など。ひとことでいえば、矛盾する各側面<sup>(153)</sup>の特徴を理解しないこと。これを、問題を一面的にみるという。あるいは一部分をみて全体<sup>(154)</sup>をみない・木をみて森をみない、という。これでは、矛盾を解決する方法を探せず、革命の任務を完成できず、まかされた仕事をりっぱにできず、党内の思想闘争を正しく発展させられない。孫子は軍事を論じていう、「彼を知り己を知れば、百戦あやうからず」。かれがいうのは、戦争する双方のことである。唐代の魏徴が「兼せ聴けば明るく、偏り信ずれば暗し」といったのも、一面的であること<sup>(155)</sup>の誤りがわかっていたのである。しかしわが同志たちは、しばしば一面的に問題をみるので、しばしば壁にぶつかる。『水滸伝』では、宋江が祝家荘を三たび攻めるが、二回目までは情況が不明で、方法がまちがっていたため、負けた。後に方法を改め、情況の調査から始め、迷路を知りつくし、李家荘・扈家荘・祝家荘の同盟をこわし、敵の陣営に伏兵をおき、外国の物語にいう木馬の計に似た方法を

使って、三度目は勝った。『水滸伝』には唯物弁証法の例がたくさんあるが、この「三たび祝家荘を打つ」はいちばんいい例の一つといえる。レーニンはいう、「対象をほんとうに認識するには、そのすべての側面・つながり・『媒介』を把握・研究しなければならない。これは完全にはできないだろうが、全面性<sup>(156)</sup>の追求は認識の誤り・硬化を防ぐであろう」。われわれはかれのことばを銘記すべきである。表面的とは、矛盾の総体・矛盾する各側面の特徴をみようと思わず、物事に深く入って矛盾の特徴をくわしく研究する必要を認めず、そのへんにつっ立って遠くから眺め、矛盾の姿<sup>(157)</sup>をおおざっぱにみただけで、矛盾の解決（問題に答え・紛争を解決し・工作を処理し・戦争を指揮すること）にのりだそうとすることである。こんなやり方では、混乱しないわけにはいかない。中国の教条主義・経験主義の同志たちが誤りを犯すのは、物事をみる方法が主観的・一面的・表面的<sup>(158)</sup>だからである。一面的・表面的なのは主観的である、なぜならすべての客観的物事は本来たがいにつながりあい・内なる法則をもつのに、人々がこの状況をありのままに反映させず・一面的・表面的<sup>(159)</sup>にみただけで、物事がたがいにつながりあい、内なる法則をもつことを認識しないから、この<sup>(160)</sup>方法は主観主義<sup>(161)</sup>なのである<sup>(162)</sup>。

物事が発展する全過程の矛盾の動きは、その相互の結びつき<sup>(163)</sup>・その各側面の状況からみた特徴に注意しなければならないだけでなく、過程が発展する各段階がもつ特徴にも注意しなければならない。

物事発展過程の根本矛盾<sup>(164)</sup>・根本矛盾に規定される過程の本質は、過程が終わるまでなくなるが、物事が発展する長い過程の各発展段階は、情況<sup>(165)</sup>がしばしばたがいに区別される。これは物事発展過程の根本矛盾の性質・過程の本質は変化しなくとも、根本矛盾が長い過程の各発展段階でしだいに激しいかたちをとるからである。しかも根本矛盾に規定され・影響される多くの・大小の矛盾のうち、あるものは激しくなり、あるものは一時的・部分的に解決され・緩和し、あるものは生まれるため、過程に段階性が現われる。もし物事発展過程の段階性に注意しないならば、物事の矛盾は適当に処理できない。

たとえば、自由競争時代の資本主義は帝国主義に発展するが、このときプロレタリア階級・ブルジョア階級という二つの根本から矛盾している階級の性質・この社会の資本主義の本質が変化するわけではない、だが両階級の矛盾が激化し、独占資本と非独占資本<sup>(166)</sup>間に矛盾が

生まれ、宗主国と植民地との矛盾が激化し、資本主義各国間の矛盾・すなわち各国の発展の不均衡<sup>(167)</sup>状態<sup>(168)</sup>による矛盾が特に鋭く現われ、資本主義の特殊な段階・帝国主義段階を形づくる。レーニン主義が帝国主義とプロレタリア革命時代のマルクス主義となったのは、レーニン・スターリンがこれらの矛盾を正しく説明し、これらの矛盾を解決するプロレタリア革命の理論と戦略を正しく作ったからである。

辛亥革命に始まる中国のブルジョア民主主義革命の過程の情況<sup>(169)</sup>にも、いくつかの特殊な段階がある。とくにブルジョア階級が領導<sup>(170)</sup>した時期の革命とプロレタリア階級が領導した時期の革命とは、二つの大きく異なる歴史的段階として区別される。つまりプロレタリア階級の領導によって革命の姿<sup>(171)</sup>が根本から変わり、階級関係の新しいムード<sup>(172)</sup>・農民革命の大高揚・反帝反封建革命の徹底性・民主主義革命から社会主義革命への転化の可能性などがでてきた。これらはすべて、ブルジョア階級が革命を領導した時期には現われえなかった。過程全体の根本矛盾の性質・過程の反帝反封建の民主主義革命の性質（その反面は半植民地半封建の性質）が変化するわけではないが、この長い間に、辛亥革命の失敗と北洋軍閥の支配・第1次民族統一戦線の樹立と1924～27年の革命・統一戦線の分裂とブルジョア階級の反革命への移行・新しい軍閥戦争・土地革命戦争・第2次民族統一戦線の樹立と抗日戦争などの大事変があり、20余年間にいくつかの発展段階を経た<sup>(173)</sup>。これらの段階には、ある矛盾が激しくなり（たとえば土地革命戦争と日本の東北4省侵略）、ある矛盾は部分的・一時的に解決され（たとえば北洋軍閥はなくなされ、われわれは地主の土地を没収した）、ある矛盾が新たに生まれる（たとえば新軍閥間の闘争、南方各地の革命根拠地が失われて地主が土地をとりかえたこと）などの特殊な情況が含まれている。

物事発展過程の各発展段階における矛盾の特殊性を研究するには、その結びつきから・総体からみなければならないだけでなく、各段階の矛盾する各側面からもみなければならない。

たとえば国共両党。国民党の側面、第1次統一戦線のとき国民党は孫中山の連ソ・連共・労農援助の3大政策を実行したので、革命的で生気に満ち、国民党は各階級の・民主主義革命の同盟<sup>(174)</sup>であった。1927年以後、国民党は相反<sup>(175)</sup>する側面に変わり、地主・大ブルジョア階級の反動集団になった。1936年12月の西安事変後、内戦をやめ・共産党と連合して日本帝国主義に共に反対する側面

に転じ始めた。これが国民党の3段階の特徴である。これらの特徴が形づくられるのは、むろんいろいろな<sup>(176)</sup>原因がある。中国共産党の側面、第1次統一戦線のとき中国共産党は幼い党であり、1924~27年の革命を英雄的に領導したが、革命の性質・任務・方法の認識という側面に幼さが現われ、革命の後期に生まれた陳独秀主義に作用を許し、革命は失敗した。1927年以後、土地革命戦争を英雄的に領導し、革命の軍隊・革命根拠地をつくったが、冒険主義の誤りを犯したので、軍隊・根拠地は大きな損失を受けた。1935年以後、冒険主義の誤りを正し、新しい抗日統一戦線を領導したので、この偉大な闘争はいままでに発展しつつある。この段階で共産党は、革命の試練を2度受け、豊かな経験をもつ党になった。これらが中国共産党の3段階の特徴である。これらの特徴が形づくられたのも、いろいろな<sup>(177)</sup>原因による。これらの特徴を研究しなければ、両党の各発展段階の特殊な相互関係、つまり統一戦線の樹立・分裂・再樹立を理解できない。両党のいろいろな<sup>(178)</sup>特徴を研究するばあい、より根本的に研究しなければならないのは、両党の階級的基礎およびこれによって形づくられる各時期の両党とそのほかの側面との矛盾の対立である。たとえば国民党は初めて共産党と連合したとき、一方では帝国主義との矛盾があるため、これに反対したが、他方では人民大衆との矛盾があるため、口では労働人民に多くの利益をと語りながら、実はごく少し与えるか・全く与えないかであった。反共戦争を進めたときは、帝国主義・封建主義と共同で人民大衆に反対し、人民大衆が革命で得たすべての利益を帳消しにしてしまい、人民大衆との矛盾を激化させた。いまの抗日期には、国民党は日本帝国主義との矛盾があるので、一面では共産党と連合しているが、同時に共産党と人民への闘争・抑圧をゆるめてはいない。共産党はどんな時でもいつも人民大衆とともに立ち、帝国主義・封建主義に反対するが、いまの抗日期には国民党が抗日を表明しているので、国民党・封建勢力に対しておだやかな政策をとっている。これらの情況から、両党は連合したり・闘争したりし、連合のときもまた連合もし・闘争もするという複雑な情況が作られる。もしこれらの矛盾する側面の特徴を研究しないならば、両党の双方とそのほかの側面との関係を理解できず、両党の相互関係も理解できない。

したがって、どんな<sup>(179)</sup>矛盾の特徴を研究するにも……それぞれのものの動きかたの矛盾・それぞれの動きかたのそれぞれの発展過程での矛盾・それぞれの発展過

程の矛盾のそれぞれの側面・それぞれの発展過程のそれぞれの発展段階での矛盾・それぞれの発展段階の矛盾するそれぞれの側面、これらすべての矛盾を研究するにも、主観的・恣意的<sup>(180)</sup>であってはならず、具体的分析をしなければならない。具体的分析を離れては、どんな<sup>(181)</sup>矛盾の特徴も認識できない。具体的物事について具体的分析を、というレーニンの教えをつねに銘記しておかなければならない。

この<sup>(182)</sup>具体的分析は、マルクス・エンゲルスが初めてすぐれた模範を示した。

マルクス・エンゲルスは物事の矛盾の法則を応用して社会・歴史の過程<sup>(183)</sup>を研究したとき、生産力と生産関係との矛盾・搾取階級と被搾取階級との矛盾・これらの矛盾から生まれる経済的土台と政治・思想などの上部構造との矛盾を見ぬき、これらの矛盾がそれぞれの異なる<sup>(184)</sup>階級社会でそれぞれの異なる社会革命を引き起こすことがなぜ避けられないかを見ぬいた。

マルクスはこの法則を応用して資本主義社会の経済構造を研究したとき、この社会の基本矛盾<sup>(185)</sup>が生産の社会性と所有の個人性<sup>(186)</sup>との矛盾にあることを見ぬいた。この矛盾は個別企業における生産の組織性と全社会における生産の無組織性との矛盾として現われる。この矛盾の階級的な現われがブルジョア階級とプロレタリア階級との矛盾である。

物事の範囲はきわめて広大<sup>(187)</sup>で、発展は無限だから、あるばあいに普遍的なもの<sup>(188)</sup>は、他のばあいには特殊性<sup>(189)</sup>に変わる。逆に、あるばあいには特殊性なもの、他のばあいには普遍性に変わる。資本主義制度に含まれる生産の社会化<sup>(190)</sup>と生産手段の個人所有制<sup>(191)</sup>との矛盾は、資本主義が存在し・発展するかぎり各国に共有なもので、資本主義からみれば矛盾の普遍性である。だが資本主義のこの<sup>(192)</sup>矛盾は、階級社会一般の発展のある歴史的段階のものであり、階級社会一般の生産力と生産関係との矛盾からみれば矛盾の特殊性である。しかしマルクスが資本主義社会のこれらすべての矛盾の特殊性を解剖するや、階級社会一般の生産力と生産関係との矛盾の普遍性も、より深く・より十分に・より完全に明らかになった。

特殊な物事は普遍的な物事と結びついており、ひとつひとつの物事の内には矛盾の特殊性だけでなく普遍性が含まれている。普遍性は特殊性の内にある、だから一定の物事を研究するとき、この両側面とそのたがいの結びつき・ある<sup>(193)</sup>物事の内なる特殊性と普遍性の両側面と



そのたがいの結びつき、ある<sup>(193)</sup>物事とそのほかの多くの物事とのたがいの結びつきを発見すべきである。スターリンは名著『レーニン主義の基礎』でレーニン主義の歴史的起源を説いたとき、レーニン主義が生まれた国際環境・帝国主義のもとで極限まで発展した資本主義の諸矛盾<sup>(194)</sup>を分析し、これらの矛盾がプロレタリア革命を直接に実践の問題とし、資本主義を直接撃つよい条件を作った、と分析した。そのうえ<sup>(195)</sup>、ロシアはなぜレーニン主義の発祥地となったのかを分析し、ツァーのロシアが帝国主義のすべての矛盾の焦点であり、ロシアのプロレタリア階級が世界プロレタリア階級の前衛隊になりえた原因を分析した。こうして、スターリンは帝国主義の矛盾の普遍性を分析し、レーニン主義が帝国主義とプロレタリア革命時代のマルクス主義であることを説明し、ツァーのロシア帝国主義がこの矛盾一般の内にもつ特殊性を分析し、ロシアがプロレタリア革命の理論と戦略のふるさとなったこと、この<sup>(196)</sup>特殊性の内にこそ矛盾の普遍性が含まれることを説明した。スターリンのこの<sup>(197)</sup>分析は、矛盾の特殊性と普遍性・たがいの結びつきを認識するための模範である。

マルクス・エンゲルス、同じくレーニン・スターリンは、弁証法を応用して客観の現象を研究するとき、主観的・恣意的<sup>(198)</sup>であってはならず、客観的・実際の動き<sup>(199)</sup>に含まれる具体的条件から、現象のなかの具体的矛盾・矛盾する各側面の具体的位置<sup>(336)</sup>・矛盾の具体的相互関係<sup>(200)</sup>をみぬかなければならないといつも教えているのである。わが教条主義者にはこの<sup>(201)</sup>研究態度がないのでなにとつうまくやれない。われわれは教条主義の失敗を戒めとして、この研究態度を身につけなければならない、このほかに研究方法はない。

矛盾の普遍性と特殊性との関係は、矛盾の共通性と個別性との関係にほかならない。共通性とは矛盾がすべての過程に存在し・すべての過程を初めから終わりまで貫くこと、矛盾は動きであり・物事であり・過程であり・思想でもある。物事の矛盾を否定することはすべてを否定することだ。これは古今東西に共通の道理で、例外はありえない。だからこそ共通性・絶対性なのだ。しかしこの共通性はすべての個別性のうちにあり、個別性がなければ共通性もない。もしすべての共通性をとりのぞいたら、どんな共通性が残るだろう？ 矛盾はそれぞれ特殊だからこそ個別性を作る。すべての個別性は条件的・一時的に存在するからこそ相対的である。

この共通性と個別性・絶対と相対の道理は、物事の矛

盾の問題の精髓であり、これがわかなければ弁証法を捨てたに等しい。

#### IV 主要矛盾と主要矛盾の側面<sup>(202)</sup>

矛盾の特殊性の問題には、特にとりあげて分析しなければならない情況<sup>(203)</sup>があつた二つある、つまり主要矛盾と主要矛盾の側面<sup>(202)</sup>である。

複雑な物事の発展過程には、多くの矛盾が存在するが、そのうち一つ<sup>(204)</sup>は主要矛盾であり、その存在・発展が他の矛盾の存在・発展を規定し影響するように必ずなる<sup>(205)</sup>。

たとえば資本主義社会では、プロレタリア階級とブルジョア階級という二つの矛盾している力が主要矛盾であり、その他の矛盾する力、たとえば残存する封建階級とブルジョア階級との矛盾・プチブルジョア農民とブルジョア階級との矛盾・プロレタリア階級とプチブルジョア農民との矛盾・非独占ブルジョア階級<sup>(206)</sup>と独占ブルジョア階級との矛盾・ブルジョア民主主義とブルジョアファシズムとの矛盾・資本主義国家間の矛盾・帝国主義と植民地との矛盾・その他の矛盾は、みなこの主要矛盾の力により規定され・影響される。

半植民地国では、中国のように、主要矛盾と非主要矛盾<sup>(207)</sup>の関係が複雑な情況<sup>(208)</sup>を呈している。

帝国主義がこの<sup>(209)</sup>国に侵略戦争を行なうとき、この国の各階級は、一部の売国分子をのぞけば、一時的に団結し・民族戦争で帝国主義に反対できる。このとき帝国主義とこの<sup>(210)</sup>国との矛盾は主要矛盾になり、この<sup>(211)</sup>国の各階級のすべての矛盾（封建制度と人民大衆との主要矛盾をも含めて）は、一時的に副次的・従属的位置にさがる。中国の1840年のアヘン戦争・1894年の中日戦争・1900年の義和団戦争・現在の中日戦争は、みなこの情況<sup>(212)</sup>である。

しかし別の情況<sup>(213)</sup>では、矛盾の位置が変化する。帝国主義が戦争によってでなく、政治・経済・文化などのよりおだやかなかたちで抑圧するとき、半植民地国の支配階級は帝国主義に投降し、両者は同盟を結んで人民大衆を共同で抑圧する。このとき<sup>(214)</sup>人民大衆はしばしば国内戦争のかたちで帝国主義と封建主義との同盟に反対し、帝国主義はしばしば直接行動でなく間接方式で半植民地国の反動派が人民を抑圧するのを助けるので、内部矛盾は特に鋭く現われる。中国の辛亥革命戦争・1924～27年の革命戦争・1927年以後10年の土地革命戦争は、み

なこの情況<sup>(215)</sup>である。さらに半植民地国の各反動支配集団間の内戦、たとえば中国の軍閥戦争もこれ<sup>(216)</sup>に属する。

国内革命戦争が發展して帝国主義とその手先である国内反動派の存在を根本からおびやかすとき、帝国主義はしばしばこのほかの方法で支配の維持をはかる、つまり革命陣営内部を分裂させたり、国内反動派を助けるため直接出兵したりする。このとき<sup>(217)</sup>帝国主義と国内反動派は全く公然と一方の極に立ち、人民大衆は他方の極に立ち、これが主要矛盾となりその他の矛盾の發展状態<sup>(218)</sup>を規定し・影響を与える。十月革命後資本主義諸国がロシア反動派を助けたのは、武力干渉の例である。1927年の蒋介石の裏切りは、革命陣営の分裂の例である。

しかしいづれにしても、過程が發展する各段階で、一つの主要矛盾が領導作用をしていることになるだけ<sup>(219)</sup>だというのは全く疑いない。

したがって<sup>(220)</sup>、どんな過程でも多くの矛盾が存在するなら、そのうち一つが主要なもので領導作用・決定作用をしており、そのほかは副次的・従属的位置にあるように必ずなる<sup>(221)</sup>。だからどんな過程を研究するにも、二つ以上の矛盾がある複雑な過程なら、全力をあげて主要矛盾を探し出さなければならない。この主要矛盾をつかまえば、すべての問題はたやすく解ける。これはマルクスの資本主義社会研究がわれわれに教えている方法である。レーニン・スターリンが帝国主義と資本主義の全般的危機・ソ連経済を研究したときにもこの<sup>(222)</sup>方法を教えている。数知れぬ理論家・実践家<sup>(223)</sup>はこの<sup>(224)</sup>方法がわからず五里霧中、中心を探しあてられず・矛盾を解決する方法も探しあてられない。

過程のあらゆる矛盾をひとしく扱ってはならず、主要なもの・副次的なものの二つに区別し、主要矛盾の把握に重点をおかなければならないことはうえに述べたとおりである。では主要な矛盾であれ・副次的なものであれそれぞれの<sup>(225)</sup>矛盾において、矛盾している両側面はひとしく扱えるであろうか？ やはりだめである。どんな矛盾でも、矛盾する諸側面は<sup>(226)</sup>發展が不均衡である。ときには勢力伯仲にみえるが、これは一時的・相対的情況<sup>(227)</sup>にすぎず、基本のかたち<sup>(228)</sup>は不均衡である。矛盾している両側面は、一方が主要側面・他方が副次的側面であるように必ずなる<sup>(229)</sup>。その主要側面とは、その矛盾が主導的に動く<sup>(230)</sup>、その側面である。物事の性質は、主として支配的位置を占めている矛盾の主要側面によって規定される。

しかしこの情況<sup>(231)</sup>は固定したのではなく、矛盾の主要側面・非主要側面はたがいに転化しあうし、物事の性質もそれにつれて變化する。矛盾の發展する一定の過程・一定の段階では、主要側面が甲の側に属し・非主要側面が乙の側に属するが、別の發展段階・發展過程ではその位置が代わる、これは物事の發展において矛盾する双方が鬭争する力の増減によって決定される。

われわれはよく「新陳代謝」という。新陳代謝は、世界の・普遍的な・永遠にさからえない法則である。物事はその性質・条件により、異なる飛躍のかたち<sup>(232)</sup>を経て、他の物事に転化するが、これが新陳代謝の過程である。どんな物事の内にもみな新旧両側面の矛盾があり、一連の曲折した鬭争を形づくる。鬭争の結果、新しい側面は小から大へ変わり・支配的なもの<sup>(233)</sup>に上昇し、古い側面は大から小へ変わり・しだいに亡びるものになる。新しい側面が古い側面に対して支配的位置を占めるや、古い物事は新しい物事へ性質が變化する。したがって<sup>(234)</sup>、物事の性質は主として支配的位置を占めている<sup>(235)</sup>矛盾の主要な側面によって規定される。支配的位置を占めている<sup>(235)</sup>矛盾の主要な側面が變化すると、物事の性質もそれにつれて變化する。

資本主義社会では、資本主義が古い封建時代の<sup>(236)</sup>従属的位置から支配的位置を占める力<sup>(237)</sup>に転化し、社会の性質も封建主義から資本主義へ変わる。新しい資本主義の時代<sup>(238)</sup>には、封建勢力はもとの支配的位置から従属的位置に力が変わり、しだいに消滅する、たとえばイギリス・フランスのように。生産力の發展につれて、ブルジョア階級は新しい・進歩作用をする階級から、古い・反動作用をする階級に転化し、最後にプロレタリア階級によってくつがえされ、私有の生産手段を奪われ・権力をなくした階級に転化し、この階級もしだいに消滅する。ブルジョア階級より数が多く・ブルジョア階級とともに育つが・ブルジョア階級に支配されているプロレタリア階級は、新しい力であって、初期の・ブルジョア階級に従属する位置からしだいに壮大になり、独立した・歴史で主導作用をする階級となり、最後には政權を奪い支配階級となる<sup>(239)</sup>。このとき社会の性質は、古い資本主義社会から新しい社会主義社会へ転化する。これはソ連がすでに歩んだ道であり、すべての他の国が必ず歩む道である。

中国の情況についていえば、帝国主義は半植民地を形づくる矛盾<sup>(240)</sup>の主要な位置にあり、中国人民を抑圧するので、中国は独立国から半植民地へ変わった。しかし

事柄(241)は、必ず変化するはずだ。双方が闘争するなかで、中国人民の・プロレタリア階級の領導のもとに育ってくる力は、必ず中国を半植民地から独立国に変えるはずで、帝国主義は打倒され・旧中国は必ず新中国に変わるだろう(242)。

旧中国から新中国への変化には、国内の古い封建勢力と新しい人民勢力との間の情況の変化も含まれている。古い封建地主階級は打倒され、支配者から被支配者になり、この階級もしだいに消滅する。人民はプロレタリア階級の領導のもとで、被支配者から支配者になる。このとき中国社会の性質は変化し、古い半植民地・半封建社会から新しい・民主主義の(244)社会に変わる。

このたがいに転化しあう事柄(245)は、過去に経験がある。300年近く中国を支配した清帝国(246)は、辛亥革命のとき打倒され、孫中山の領導する革命同盟会は、一度は勝利した。1924~27年の革命戦争で、共産党と国民党とが連合した南方の革命勢力(247)は、弱小な力(248)から強大な力になり、北伐の勝利をかちとり、かつてはおごれる(249)北洋軍閥は打倒された。1927年、共産党の領導する人民の力(250)は、国民党反動勢力の打撃を受け小さくなったが、自己の内なる日和見主義を清算するや、またしだいに壮大になった。共産党の領導する革命根拠地では、農民が被支配者から支配者に転化し、地主は相反する(251)転化をとげた。世界はつねにこのように新しいものが古いものに代わり、新陳代謝・除旧布新・推陳出新が行なわれるのである。

革命闘争はあるときは困難な条件が順調な条件をこえるが、このときは困難が矛盾の主要側面であり、順調が副次的側面である。しかし革命党員(252)の努力によって困難はしだいに克服され、順調な新局面が開かれ、困難な局面は順調な局面に席をゆずる。1927年に中国革命が失敗したあとの情況(253)・中国紅軍の長征における情況(253)は、みなこうである。いまの中日戦争で中国はまた困難な位置にあるが、この情況(254)を変え、中日双方の情況(254)を根本から変化させることができる。相反する情況(255)で、順調も困難に転化する、革命党員が誤りを犯せば、である。1924~27年の革命の勝利は失敗に変わった。1927年以後南方各省に発展した革命根拠地は、1934年までにみな失敗した。

学問を研究するときの、無知から知へ(256)の矛盾もこうである。マルクス主義の研究を始めたばかりのときはマルクス主義を知らないか・あまり知らない情況とマルクス主義の知識とはたがいに矛盾している。しかし努力

して学習すれば、無知から知へ・乏しい知識から豊かな知識へ転化し、マルクス主義に対する盲目さからそれを使いこなすところまで改めうる。

ある矛盾はこうではないと思う人もいる。たとえば、生産力と生産関係との矛盾では生産力が主要なもの・理論と実践との矛盾では実践が主要なもの・経済的基礎と上部構造との矛盾では経済的基礎が主要なものであり、それらの位置がたがいに転化しあうわけではない、と。これは機械的唯物論の見解であって、弁証唯物論の見解ではない。たしかに、生産力・実践・経済的基礎は、一般には主要な・決定的作用として現われるのであって、これを認めないものは唯物論者ではない。しかし、生産関係・理論・上部構造という側面もある条件では、主要な・決定的作用として現われるのであって、これも認めなければならない。生産関係を変更しなければ生産力が発展しえないときは、生産関係の変更が主要な・決定的作用をする。レーニンのいう「革命の理論がなければ、革命の運動はありえない」というときは、革命の理論を作り・提唱することが主要な・決定的作用をする。ある事柄(257)（どんな事柄(257)でも同じ）をやりたいが、まだ方針・方法・計画・政策がないときは、方針・方法・計画・政策を確定することが主要な・決定的なものである。政治・文化などの上部構造が経済的基礎の発展を妨げているときは、政治・文化を革新することが主要な・決定的なものになる。こういうのは唯物論に反するであろうか？ 反しない。なぜなら歴史の発展全体では物質的なもの(258)が精神的なもの(259)を決定し・社会的存在が社会的意識を決定することを認めるからである、だが同時に精神的なものの反作用・社会的意識の社会的存在に対する反作用・上部構造の経済的基礎に対する反作用も認めるし・認めなければならない。これは唯物論に反するどころか、機械的唯物論を避け、弁証唯物論を堅持することである。

矛盾の特殊性の問題を研究するには、もし過程の主要矛盾と非主要矛盾および矛盾の主要側面と非主要側面という二つの情況(260)を研究しなければ、つまりこの二つの矛盾情況(261)のちがいを(262)も研究しなければ、抽象的研究に陥り、矛盾情況(261)が具体的にわからず、矛盾を正しく解決する方法も探し出せない。この二つの矛盾情況のちがいを(263)・特殊性とは、矛盾する力の不均衡性(264)である。世界には絶対的に均衡(265)発展するものではなく、均衡論(266)・平衡論(267)に反対しなければならない。同時にこの具体的な矛盾状況(268)および矛盾の主要

側面・非主要側面の発展過程における変化こそ、新しい物事が古い物事に代わる力の現われなのである。矛盾のそれぞれの<sup>(269)</sup>不均衡<sup>(270)</sup>な情況の研究、主要矛盾と非主要矛盾・主要矛盾の側面<sup>(271)</sup>と非主要矛盾の側面<sup>(272)</sup>の研究こそ、革命政党がその政治的・軍事的戦略・戦術方針を正しく決定するための重要な方法の一つとなることに、すべての共産党員は注意しなければならない。

## V 矛盾する諸側面<sup>(273)</sup>の同一性と闘争性

矛盾の普遍性・特殊性の問題がわかったら、進んで矛盾する諸側面の同一性・闘争性の問題を研究しなければならない。

同一性・統一性・一致性・たがいに浸透しあうこと・貫通しあうこと・依存(依頼)しあうこと・結びあうこと・協力しあうこと<sup>(274)</sup>、これらの異なる名詞はみな同じ意味であり、次の二つの情況をいっている。第1は物事の発展過程のひとつひとつの<sup>(275)</sup>矛盾する両側面は、それぞれ<sup>(276)</sup>対立している側面を自己の存在の前提とし双方は一つの統一体<sup>(277)</sup>の内に共存していること、第2は矛盾している双方がある条件によってそれぞれ相反する側面に転化すること<sup>(278)</sup>。これらが同一性というものである。

レーニンはいう、「弁証法とはこのような学説である、すなわち対立<sup>(279)</sup>がどうして同一であり<sup>(280)</sup>うるのか・同一になる<sup>(281)</sup>のか(同一に変わる<sup>(282)</sup>のか)——どんな条件でたがいに転化しあい・同一になるのか——人間の頭脳はなぜこの対立<sup>(279)</sup>を死んだ・かたまつたものとはみず、生きて・条件的な・変わりうる・たがいに転化しあうものとみるべきなのか、を研究する」。

レーニンのこのことばはどんな意味か？

すべての<sup>(283)</sup>過程の矛盾している各<sup>(284)</sup>側面は、もともとたがいに排斥・闘争・対立しあっている。世界のすべての物事の過程・人々の思想は、このような矛盾性をもつ側面を含んでおり、例外はない。単純な過程には一つ<sup>(285)</sup>の矛盾だけだが、複雑な過程は一つ以上<sup>(286)</sup>の矛盾がある。それぞれ<sup>(287)</sup>の矛盾も、たがいに矛盾をなしている。客観世界のすべての物事・人々の思想は、このように形づくられ・それらの動きが生まれる。

こういふと<sup>(288)</sup>、まったく不同一・不統一であるのに、どうして同一であり・統一であるというのか？

もともと矛盾している各<sup>(289)</sup>側面は、孤立しては存在できない。もしたがいに対をなす<sup>(290)</sup>矛盾の一側面がな

ければ、もう一つの側面も存在の条件を失う。すべての矛盾している物事・人々の心にある矛盾している概念はどんな側面であれ独立して存在しうるであろうか？ 生なくして死なし、死なくして生なし。上なくして下なし、下なくして上なし。禍なくして福なく、福なくして禍なし。順調なくして困難なく、困難なくして順調なし。地主なくして小作農なく、小作農なくして地主なし。ブルジョア階級なくしてプロレタリア階級なく、プロレタリア階級なくしてブルジョア階級なし。帝国主義の民族抑圧なくして植民地・半植民地なく、植民地・半植民地なくして帝国主義の民族抑圧なし。すべての対立する要素はみなこうであり、ある条件で、一面ではたがいに対立しつつ・他面ではたがいに結びあい・貫きあい・浸透しあい・依存しあうのであって、この性質を同一性という<sup>(291)</sup>。すべての矛盾している側面はある条件で不同一性<sup>(292)</sup>をもっているので矛盾とよぶ。しかし同一性ももっているので、たがいに結びあう。レーニンが弁証法とは「対立<sup>(293)</sup>がどうして同一でありうるのか」を研究することだといったのは、この情況<sup>(294)</sup>のことである。どうしてか？ たがいに存在の条件だから。これが同一性の第1の<sup>(295)</sup>意義である。

しかし矛盾する双方はたがいに存在の条件をなし、双方は同一性をもつから統一体のうちに共存しうるというだけで十分であろうか？ まだ不十分だ。矛盾する双方がたがいに依存しあう、で事柄<sup>(296)</sup>は終わるのではなく、より重要なのは矛盾している物事がたがいに転化しあうことである。つまり<sup>(297)</sup>物事の内なる矛盾している両側面は、ある条件でたがいに相反する側面に転化しあい・対立する側面と地位が転化しあう。これが矛盾の同一性の第2の意義である。

なぜここにも同一性があるのか？ ほら<sup>(298)</sup>、支配されるプロレタリア階級は革命を経て支配者に転化し、もともと支配者であったブルジョア階級は、被支配者に転化し、相手がもといいた位置に転化する。ソ連はすでにこうなったし、全世界もやがてこうなる。もしある条件のもとでのつながり・同一性がないなら、どうしてこのような変化が生まれうるのか？

中国近代史のある段階である積極作用をした国民党は、固有の階級性と帝国主義の誘惑(これらが条件)とによって1927年以後反革命に転化したが、中日矛盾の尖鋭化と共産党の統一戦線(これらが条件)とによって、抗日に賛成するよう迫られている。矛盾しているもの<sup>(299)</sup>はこれからあれへ変わる、その間にある同一性が含まれ

ている。

われわれの実行した土地革命は、これまでもそうであったし、これからもうこういう過程をたどるのであろう、土地をもつ地主階級は土地なき階級に転化し・土地なき農民は土地をもつ小私有者に転化するという過程を。有無・得失は、ある条件でたがいに結びあい、両者は同一性をもつ。社会主義の条件で、農民の私有制はさらに社会主義農業の公有制に転化しよう、ソ連はすでにこうなったし、全世界もやがてこうなる。私有財産と公有財産との間にはこちらからむこうへ<sup>(300)</sup>の橋があり、哲学では同一性・たがいに転化・浸透しあうという。

プロレタリア独裁・人民独裁をかためるとは、まさにこの独裁をなくし、どんな国家制度をも消滅させる・より高い段階への条件を準備することである。共産党を樹立し発展させるとは、共産党とすべての政党制度を消滅させる条件を準備することである。共産党の領導する革命軍を樹立し・革命戦争を進めるとは戦争を永遠に消滅させる条件を準備することである。この多くの相反するもの<sup>(301)</sup>は、同時に相成るもの<sup>(302)</sup>である。

みなが知っているように、戦争と平和はたがいに転化しあう。戦争は平和に転化する、たとえば第一次世界大戦は戦後平和に転化したし、中国の内戦もいまはやみ国内は平和である。平和は戦争に転化する、たとえば1927年に国共合作は戦争に転化したし、いまの世界平和の局面も第2次世界大戦に転化するかもしれない。なぜこうなのか？ 階級社会の戦争・平和という矛盾している物事は、ある条件で同一性をもっているからである。

すべての矛盾しているもの<sup>(303)</sup>は、たがいにつながっており、ある条件で統一体として共存するばかりでなく、ある条件でたがいに転化しあう、これが矛盾の同一性の意義のすべてである。レーニンが「どうして同一になり(同一に変わり)——どんな条件でたがいに転化しあい、同一になるのか」というのは、この意味にほかならない。

「人間の頭脳はなぜこの対立を死んだ・かたまつたものとはみず、生きた・条件的な・変わりうる・たがいに転化しあうものとみるべきなのか？」客観の物事<sup>(304)</sup>は本来こうだからである。客観の物事の矛盾している諸側面の統一・同一性は、本来死んだ・かたまつたものではなく、生きた・条件的な・変わりうる・一時的・相対的なものであり、すべての矛盾はみなある条件でその反面に転化する。この状況が人々の思想に反映し、マルクス主義の・唯物弁証法の世界観<sup>(305)</sup>になった。いまの・

歴史上の反動的支配階級とかれらに奉仕する形而上学だけが、対立する物事を生きた・条件的な・変わりうる・たがいに転化しあうものとみず、死んだ・かたまつたものとして、この誤った見方<sup>(306)</sup>をいたるところで宣伝し・人民大衆を惑わし・その支配を続ける目的を達しようとする。共産党員の任務は反動派と形而上学の誤った思想をあげき<sup>(307)</sup>・物事本来の弁証法を宣伝し・物事の転化を促し・革命の目的を達することである。

矛盾がある条件で同一性をもつというのは、つまりわれわれのいう矛盾が現実的・具体的矛盾であり、矛盾がたがいに転化しあうのも現実的・具体的だということである。

神話にある多くの変化、たとえば『山海経』にいう「夸父、太陽を追う」とか、『淮南子』にいう「羿、九つの太陽を射る」とか、『西遊記』にいう孫悟空の七十二変化とか『聊斎志異』にいう多くの・狐が人にバケる物語<sup>(308)</sup>など、神話で矛盾がたがいに変化するというのは、無数の複雑な・現実の矛盾の変化が人々に引き起こす幼稚な・想像の・主観の幻想の変化であり、具体的矛盾が具体的変化として現われるのではない。マルクスはいう、「どんな神話もみな想像によって・想像を借りて自然力を征服し・支配し・形象化するから、これら自然力が実際に支配されるや神話もなくなる」と。この神話の(また童話の)千変万化の物語は、自然力などの征服を想像したものであるから、人々を喜ばせるし、よい神話は「永遠の魅力」(マルクス)をもっているが、神話は具体的矛盾のある条件を根拠として構成されたのではなく、現実の科学的反映ではない。つまり神話や童話で矛盾が構成する諸側面<sup>(309)</sup>は、具体的同一性ではなく、幻想的同一性にすぎない。現実の変化の同一性の科学的反映こそ、マルクス主義の弁証法にほかならない。

なぜ卵はひよこに転化するのに、石はひよこに転化しえないのか？ なぜ戦争と平和は同一性をもつのに、戦争と石は同一性をもたないのか？ なぜ人間は人間を生めるが、他のものを生めないのか？ ほかにでもない、矛盾の同一性はある必要条件を要するからである。ある必要条件を欠けば、どんな同一性もない。

なぜロシアでは1917年2月のブルジョア民主主義革命が同年10月のプロレタリア社会主義革命に直接つながっているのに、フランスのブルジョア革命は社会主義革命に直接つながらず・1871年のパリ・コムューンは失敗に終わったのか？ なぜ蒙古・中央アジアの遊牧制度も直接に社会主義につながったのか？ なぜ中国革命は資

本主義の道避け社会主義と直接つながることができ、西洋諸国の歴史・古い道<sup>(310)</sup>を歩む必要がなく、ブルジョア独裁期を経る必要がないのか？ ほかでもない、みなそのときの具体的な条件によるのである。ある必要条件が備われば、物事の発展過程にある矛盾が生まれ、この・これらの矛盾はたがいに依存・転化しあう、さもないとすべてが不可能である。

同一性の問題はこのとおりである。では、闘争性とは何か？ 同一性と闘争性との関係はどうか？

レーニンはいう、「対立<sup>(311)</sup>の統一（一致・同一・合一<sup>(312)</sup>）は、条件的・一時的・過渡的<sup>(313)</sup>・相対的である。たがいに排斥しあう・対立の闘争が絶対的なのは、発展・動きが絶対的なのと同じである。」

レーニンのこのことばはどんな意味か？

すべての過程には初めと終わりがあり、すべての過程はみなその対立物<sup>(314)</sup>に転化する。すべての過程の不変性<sup>(315)</sup>は相対的だが、ある過程が他の過程に転化する可変性<sup>(316)</sup>は絶対的である。

どんな物事の動きも二つの状態<sup>(317)</sup>をとる、相対的静止の状態<sup>(317)</sup>と顕著に変動する状態<sup>(317)</sup>とである。二つの状態<sup>(317)</sup>の動きは物事の内に含まれる二つの矛盾している要素がたがいに闘争しあうことによって引き起こされる。物事の動きが第1の状態にあるときは、数が変化<sup>(318)</sup>するだけで性質は変化しないので、ちょうど静止しているように見える。物事の動きが第2の状態にあるときは、第1の状態の数の変化がある極点に達し、統一物<sup>(319)</sup>を分解させ・性質を変化させるので、顕著な変化にみえる。日常生活にみる統一・団結・連合・調和・均勢・対峙・膠着・静止・恒常・均衡・凝集・吸引などは、みな物事の量の変化の状態で見られる。統一物の分解、つまり団結・連合・調和・均勢・対峙・膠着・静止・恒常・均衡・凝集・吸引などの状態が破れ、相反する状態に変わるのは、物事の質の変化の状態、ある過程が他の過程に変化するときに現われる。物事はいつも第1の状態から第2の状態にたえず転化し、矛盾の闘争は二つの状態を通じて存在し、第2の状態を経て矛盾が解決される。だから、対立の統一は条件的・一時的・相対的であり、対立がたがいに排除しあう闘争は絶対的である。

先に、二つの相反するものには同一性があるから両者は統一体のうちに共存<sup>(320)</sup>でき・たがいに転化しあえるといったのは条件性のことである、すなわちある条件で矛盾するものは統一でき・たがいに転化しあえるのであって、ある条件がなければ矛盾となりえず・共存<sup>(321)</sup>で

きず・転化もしえない<sup>(322)</sup>。ある条件でのみ矛盾の同一性が構成されるから、同一性は条件的・相対的である。いまひとつ、矛盾の闘争は過程を初めから終わりまで貫き・ある過程を他の過程に転化させるのであり、矛盾の闘争はどこにもある、だからこそ矛盾の闘争性は無条件的・絶対的である<sup>(323)</sup>。

条件的・相対的同一性と無条件的・絶対的闘争性とが結合<sup>(324)</sup>しあって、すべての物事の矛盾の動きを構成する。われわれ中国人はよく「相反し、相成る<sup>(325)</sup>」という。相反するもの<sup>(326)</sup>は同一性をもつということだ。このことばは弁証法であって、形而上学ではない。「相反する」とは、矛盾する両側面がたがいに排斥しあひ・闘争しあうことである。「相成る」とは、ある条件で矛盾の両側面がたがいに結びあひ、同一性を得ることをいう。闘争性は同一性のうちにあり、闘争性がなければ同一性はない。

同一性のうちに闘争性があり、特殊性のうちに普遍性があり、個別性のうちに共通性がある。レーニンのことばでいえば、「相対的なもの<sup>(327)</sup>のなかに絶対的なものがある」。

## VI 矛盾における敵対<sup>(328)</sup>の位置<sup>(336)</sup>

矛盾の闘争性の問題には、敵対とはなにかという問題が含まれている。われわれの答えは、敵対とは矛盾の闘争の一つのかたち<sup>(329)</sup>であって、すべてのかたちではない、ということである。

人類史には階級の敵対が存在しているが、これは矛盾の闘争の特殊な現われである。搾取階級と被搾取階級との矛盾は、奴隷社会であれ・封建社会であれ・資本主義社会であれ、たがいに矛盾している両階級が、長期にわたって一つの社会に共存<sup>(330)</sup>し・たがいに闘争しあっている、だが両階級の矛盾がある段階に発展するや、双方は公然たる敵対のかたちになり・革命に発展する。階級社会の平和から戦争への転化もこうである。

爆弾がまだ爆発しないときは、矛盾するものがある条件で統一体のうちに共存<sup>(331)</sup>しているときである。新しい条件(点火<sup>(332)</sup>)が現われるや爆発が生まれる。自然界のすべてが最後には外的衝突のかたちで旧矛盾を解決し・新しい物事を生む現象は、みなこれと似た状況である。

この状況を認識することがきわめて重要である。これによって次のことがわかる、階級社会では革命と革命戦争が避けられないこと、それなしに社会発展の飛躍を完

成させ・反動的支配階級をくつがえし・人民に政権を獲得させることはできないこと、が、共産党員は社会革命は必要ないとか不可能だとかいう反動派の欺瞞宣伝をあげき・マルクス・レーニン主義の社会革命論を堅持し・人民に次のことをわからせなければならない、社会革命は全く必要であるのみならず全く可能であること・人類の歴史全体とソ連の勝利がこの科学的真理を証明しているのだ、ということ。

だがそれぞれの矛盾の闘争の情況は具体的に研究しなければならず、上に話した公式をすべての物事に不相当にあてはめてはならない。矛盾と闘争とは普遍的・絶対的だが、矛盾を解決する方法・すなわち闘争のかたちは矛盾の性質が異なれば異なる。公然たる敵対性をもつ矛盾もあれば、そうでない矛盾もある。物事の具体的発展を根拠として、もともと非敵対的であった矛盾が敵対的なものに発展することもあれば、もともと敵対的であった矛盾が非敵対的なものに発展することもある。

共産党内の正しい思想と誤った思想との矛盾は、前に話したように階級が存在するときは階級矛盾の党内への反映である。この<sup>(333)</sup>矛盾は初めは・個別の問題では、必ずしも直ちに敵対的なものとして現われるわけではない。だが階級闘争の発展につれて、この矛盾も敵対的なものに発展する可能性がある。ソ連共産党史が教えているように、レーニン・スターリンの正しい思想とトロツキー・ブハーリンらの誤った思想との矛盾は、初めは敵対的なかたちとして現われなかったが、のちに発展して敵対的なものとなった。中国共産党史にもこのような<sup>(334)</sup>情況があった。わが党内の多くの同志の正しい思想と陳独秀・張國燾らの誤った思想との矛盾は、敵対的なかたちとして現われなかったが、のちに発展して敵対的なものとなった。いまわが党内の正しい思想と誤った思想との矛盾は、敵対的なかたちとして現われていないが、もし誤りを犯した同志がその誤りを改めうるなら、敵対的なものに発展することはありえない。だから党は、一方で誤った思想に対してきびしい闘争を進めるとともに、他方では誤りを犯した同志に対して自覚の機会を十分に留保しなければならない。このような<sup>(334)</sup>情況で、ゆきすぎた闘争は明らかに不相当である。だが誤りを犯した人間が誤りを堅持し・拡大するなら、この矛盾も敵対的なものに発展する可能性がある。

都市と農村との経済的矛盾は、資本主義社会（ここではブルジョア階級の支配する都市が農村を残酷に掠奪する）および中国の国民党支配地区（ここでは外国帝国主

義と自国の買弁大ブルジョア階級の支配する都市が農村に対して野蠻きわまる掠奪をしている）では、きわめて敵対的な矛盾である。だが社会主義国およびわが革命根拠地では、この敵対矛盾は非敵対的の矛盾に変わり、共産主義社会に達するやこの矛盾は消滅する。

レーニンはいう、「敵対と矛盾とは、はっきりちがう。社会主義では、敵対は消滅するが、矛盾は存在する」。つまり敵対は矛盾の闘争の一つのかたちにはすぎず、すべてのかたちではないから、この公式をどこにもあてはめることはできない。

## Ⅶ 結 び (337)

ここまでくると、いくつかのことばで総括できる。物事の矛盾の法則、すなわち対立と統一の法則は、自然と社会の根本法則であり、したがって思惟の根本法則でもある。それは形而上学の世界観とは相反する。それは人類の認識史にとって大きな革命である。弁証唯物論の観点によれば、矛盾はすべての客観の物事・主観の思惟の過程に存在し、すべての過程を初めから終わりまで貫く、これが矛盾の普遍性・絶対性である。矛盾している物事およびひとつひとつの側面には、それぞれその特徴があり、これが矛盾の特殊性・相対性である。矛盾している物事はある条件で同一性をもつから、統一体のうちに共存でき・たがいに相反する側面に転化できる、これも矛盾の特殊性・相対性である。しかし矛盾の闘争はたえることなく、共存のときも・たがいに転化しあうときも闘争が存在し、とくに転化しあうときは闘争の現われがより顕著である、これも矛盾の普遍性・絶対性である。矛盾の特殊性・相対性を研究するときは、矛盾と矛盾の側面との主要・非主要の区別に注意し、矛盾の普遍性・闘争性を研究するときは、それぞれの異なる闘争のかたちの区別に注意しなければならない、さもないと誤りを犯す。もし研究を経て上述の要点がほんとうにわかれば、マルクス・レーニン主義の基本原則に反する・わが革命事業に不利な教条主義の思想を打破することができ、経験ある同志たちに自らの経験を整理させ・原則性を与え経験主義の誤りをくり返すことを避けることができる。これらが矛盾の法則を研究した簡単な結び<sup>(337)</sup>である。

### 《注》

既訳のうちここで参照したのは以下の9種である。

1. 國民文庫訳、毛沢東選集刊行会訳、1952年10月刊、

1958年10月発行の新訳第8版による。国と略す。以下同じ。ただし、わたくしの参照したのはいまでは旧版で現行の「国民文庫訳」は「新日本出版社」と同じである。

2. 岩波文庫訳，松村一人・竹内実訳，1957年5月刊，1969年10月発行の第17刷。
3. 平凡社訳，竹内好訳『世界教養全集』，第15巻所収，1962年2月刊，1969年7月発行の第17刷。
4. 青木文庫訳，尾崎庄太郎訳，1964年9月改訂第1刷，1970年5月発行の改訂第8刷。
5. 角川文庫訳，安藤彦太郎訳，1965年11月刊，1970年2月発行の第7版。
6. 新日本出版社『毛沢東選集』，第1巻所収邦訳，1965年11月初版。
7. 河出書房訳，浅川謙二・安藤彦太郎訳『世界の大思想』，II-16所収，1967年10月初版。
8. 外文出版社『毛沢東選集』，第1巻所収の邦訳，1968年初版。
9. 中央公論社訳，小野和子訳『世界の名著』，64所収，1969年7月初版。

以下〈 〉内はすべて中国語である。

- (1) 〈事物〉 既訳はすべて「事物ジブツ」
- (2) 〈对立統一〉 国岩平青「对立物の統一」，角河「对立・統一」，新外中「対立面の統一」，〈对立〉を「対立物」と訳すのはよくない。毛沢東は〈对立〉(対立の状態あるいは関係，抽象的把握)と〈对立物〉(対立しているモノ，具体的把握)とを区別している。「対立面」は「対立物」よりはいいがまだ不満が残る。(たとえば，〈關於正確處理人民内部矛盾的問題〉に出てくる〈対立面〉との区別がつかなくなる)。既訳の中では角河を評価したい。また「对立物の統一」「対立面の統一」は〈合二而一〉と混同されはしないか。〈对立統一〉とは，要するに〈对立〉が〈統〉して〈一〉であること。ここでは「対立と統一」とかりに訳しておくが，「対立」と「統一」は時間的・空間的に完全に重なったものとして把握しなければならない。
- (3) エンゲルスの「三大法則」，スターリンの「四大法則」を意識してこう表現したのであろう。
- (4) 〈懂〉 以下〈懂を〉「わかる」，〈了解〉を「理解する」と訳す。
- (5) 〈主要的矛盾方面〉 既訳はすべて「矛盾の主要な側面」
- (6) 〈極大的興趣〉，〈極壞的影響〉 既訳は前者を「非常に大きな興味」，後者を「非常にわるい影響」「き

わめてわるい影響」としているが，〈極大〉〈極壞〉の〈極〉はリズムを整えるためのものとみておきたい。平はそれぞれ「おおいに」「よくない」

- (7) 〈作風〉 平中は「学風」，角は「傾向」，他は「作風」
- (8) 〈現在〉 国青角「いまの」，岩新河外中「現在の」，平「今日の」，既訳からは毛沢東の呼びかけのニュアンスが読みとれない。(96)と比較せよ。
- (9) 〈兩種宇宙觀〉
- (10) 〈統一物〉
- (11) 〈互相關聯〉 以下〈互相〉は「たがいに」，〈相互〉は「相互に」と訳す。
- (12) 〈唯心的〉 既訳は「観念論的(な)」
- (13) 〈資産階級初期的〉 国「ブルジョアジーの初期の」，岩「資本主義の初期の」，平「初期ブルジョア階級の」，青「初期のブルジョア」，角河外「ブルジョア階級の初期の(における)」，新中「ブルジョアジーの初期における」
- (14) 〈情況〉 〈情況〉 は以下すべて「情況」と訳す。既訳は角新河外は「狀況」に統一されているが，国は「狀況・状態・情勢・事情」の四つ，岩は「狀況・情勢・状態」の三つ，平は「情勢・状態」の二つ，中は「狀況・状態・情勢」の三つの訳語が使われている。
- (15) 〈馬克思主義的唯物弁証法的〉 既訳は「マルクス主義の唯物弁証法的」
- (16) 〈對抗〉 平角中は「敵対」だが，国岩青新河外は「對抗」，第6章標題〈對抗在矛盾中的地位〉を「敵対」と訳すいじょう，この〈對抗〉も「敵対」と訳すべき。
- (17) 〈一切〉 既訳は「すべての」，(53)と比較せよ。
- (18) 〈形態〉 既訳は「形態」
- (19) 〈數量〉 国を除き「量」，国は「数量」〈數量〉は「量」ではなく「数」である。〈数〉と「数」との間にはズレがあるように思われるが，ここでは立ち入らない。
- (20) 〈變更〉 国青「変更」，岩「変化」，平角中「移動」，新河外「變動」，毛沢東は〈變更〉と〈変化〉とを区別している。前者は〈更〉が改まるにすぎないが，後者は「有から無へ・無から有へ」の「変化」であり，〈化〉に着目している。したがって前者は同質のものどうしの変化であり，後者は同質のものから異



質のものへの変化である。

(21) 〈各種〉

(22) 〈資本主義的剝削, 資本主義的競争, 資本主義社会的個人主義思想〉

(23) 〈這種〉 国岩平角「この」, 新河外中「こうした」, 青「このような」

(24) 〈天不変, 道亦不変〉 国岩青新河外「天は不変であり, 道もまた不変である」, 中「天は変わらず, 道もまた変わらず」, 平「天が変わらないから道も変わらない」, 角「天は不変だから, 道も不変である」

(25) 〈形而上学的〉 国岩青中「形而上学的な」, 平角新河外「形而上学の」

(26) 〈形而上学的〉 国岩平青「形而上学的(な)」, 角新河外中「形而上学の」

(27) 〈相反〉 既訳はすべて「反対に」, 後に出てくる〈相反相成〉との関係に注目しておきたい。

(28) 〈唯物弁証法的〉 国角新河外中「唯物弁証法の」, 岩平青「唯物弁証法的(な)」

(29) 〈每一〉 国角「ひとつひとつの」, 新河「一つひとつの」, 外「一つ一つの」, 岩「それぞれの」, 平「どの」, 青「あらゆる」

(30) 〈聯繫〉 国岩青「つながり」, 平中「関連」, 角「連関」, 新河外「連係」

(31) 〈任何〉 国岩平「どの」, 青「いずれの」, 角外中「どんな」, 新河「どのような」

(32) 〈這種〉 国岩「このような」, 平角「この」, 青「そのような」, 新河外中「こうした」

(33) 〈運動〉 既訳は「運動」

(34) 〈這種〉 国岩平角新河外「この」, 青「このような」, 中「こうした」

(35) 〈聯繫〉 国角「連関」, 岩青「つながり」, 平中「関連」, 新河外「連係」

(36) 〈單純的増長, 数量的發展〉 既訳は「單純な成長, 量的な發展」, 〈單純的増長〉とは1本の花・1匹の動物が育つこと, 〈数量的發展〉とは花の種子からたくさんの芽が出て・動物が卵や子を生むこと。既訳からこの意味が読みとれるであろうか。

(37) 〈差異性と不平衡性〉 国岩青河「差異や不均等性」, 平「差と不均等」, 角中「差異と不均等」, 新外「相違性と不均等性」

(38) 〈情形〉 〈情形〉は以下すべて「情況」と訳す。この場合〈情況〉の訳語「情況」と区別できなくなるが, 〈情形〉と〈情況〉とのちがいは, 前者が「情

況を具体性において把握しているのに対し, 後者は前者よりも一般的に対象を把握している, といっている。既訳は〈情形〉に対して次のような訳語を無原則的にあてている。国「事情・諸事情・事柄・点・角度・状況」の六つ, 岩「状況・事態・状態・ことがら・情況」の五つ, 平「状態・実情」の二つ, 青「情況・状況・事情・こと・点・角度・事柄・諸情況」の八つ, 角「情況・事情」の二つ, 新「状況・こと・状態」の三つ, 河「状況・こと・状態」の三つ, 外「状況・もの・こと」の三つ, 中「状況・ばあい・様相」の三つ。

(39) 〈極其巨大〉

(40) 〈深刻地〉 国青角「深く」, 岩新河外中「深刻に」, 〈深刻〉は「深く刻む」の意であり, 「深刻」とは少しちがう。

(41) 〈這種〉 国岩平青角「この」, 新河外「このような」, 中「こうした」

(42) 〈這種〉 中を除き「この」, 中は「こうした」

(43) 〈由此看来〉

(44) 〈弁証法的〉 国岩新河外「弁証法的な」, 平青角中「弁証法的」

(45) 〈自発的樸素的性質〉

(46) 〈唯心的弁証法〉 国岩平青新河外中「観念論的弁証法」, 角「観念論の弁証法」

(47) 〈積極的成果〉 既訳はすべて「積極的(な)成果」, 「成果」はすべて積極的なのではないか。〈成果〉と〈成就〉とを比較せよ。

(48) 〈弁証唯物論〉 既訳はすべて「弁証法的唯物論」

(49) 〈各種〉 国青「あらゆる」, 岩河「いろいろ」, 平新河外中「さまざま」

(50) 〈了解〉 以下すべて「理解(する)」と訳す。

(51) 〈指導革命実践的發展〉 国「革命的实践的發展を指導」, 岩「革命的实践的發展の指導上」, 平「革命指導の实践を發展」, 青「革命的实践の指導の發展」, 角「革命实践の發展を指導」, 新「革命の实践の發展…をみちびいて」, 河「革命的实践的發展を指導」, 外「革命の实践の發展をみちびいて」, 中「革命の实践を導き, 發展」

(52) 〈為了這個緣故〉

(53) 〈一切〉 国青新河外「あらゆる」, 岩平中「すべての」, 角「一切の」

(54) 〈每一〉 国「あらゆる」, 岩「すべての」, 平角新外「どの」, 青「いずれの」, 河「どのような」,

中「個々の」

(55) 国岩青角は「一つの矛盾」としている。エンゲルスの訳本に頼ったのであろう。毛沢東の引用のとおりに訳すべきではないのだろうか。

(56) 〈对立統一〉 国岩平青「对立物の統一」,「对立・統一」,新河外中「対立面の統一」,河を(2)と比較せよ。

(57) 〈一切〉 既訳はすべて「すべての」,(53)と比較せよ。

(58) 〈意見〉 国平青角「意見」,岩「考え」,新河外「見解」,中「見方」

(59) 〈矛盾方面〉 国青「矛盾の諸側面」,岩平角「矛盾の側面」,新河「矛盾した側面」,外中「矛盾する側面」

(60) 〈相互依頼和相互闘争〉 〈相互〉は「相互」,〈互相〉は「たがいに」と訳しわけることにする。

(61) 〈運動形式〉 既訳は「運動形態」

(62) 〈機械的運動〉 国岩平青角「力学的運動」,新河外中「機械的運動」

(63) 〈機械的移動〉 国岩平青「力学的(な)運動」,角「力学的な場所の運動」,新河外「機械的な場所の移動」,中「機械的移動」

(64) 〈有機生命〉 国岩青角新河外中「有機的生命」,平「有機体の生命」

(65) 〈每一個〉 国岩青角新河外中「おのおの」,平「どの」

(66) 〈物体〉 国岩中「事物」,平「物体」,青角外「諸事物」,新河「諸物体」

(67) 〈産生〉 国岩「定立」,平青角中「うみだし・生みだし」,新河外「樹立」

(68) 〈人〉 既訳はすべて「人間」

(69) 〈無限〉

(70) 〈局限〉

(71) 〈人們〉 国岩青角外中「人間」,平「個々人」,新河「各人」

(72) 〈人類〉 国岩平青角「人類」,中「人間」,新河外訳さず。

(73) 〈無窮〉

(74) 〈矛盾着〉 中を除き「矛盾した」,中は「矛盾する」

(75) 〈聯結〉

(76) 〈組成〉

(77) 〈每一〉 国角新河外中「ひとつひとつ・一つ

一つ・一つひとつ」,岩青「あらゆる」,平「どれも」

(78) 〈差異〉 国を除き「差異」,国は「区別」

(79) 〈客観矛盾〉 国岩青新河外中「客観的矛盾」,平角「客観矛盾」

(80) 〈主観的思想〉 国岩新河外「主観的(な)思想」,平角中「主観的思想」,青「主観の思惟」

(81) 〈由此看来〉

(82) 〈客観現象〉 国岩青新河外「客観的現象」,平角中「客観現象」

(83) 〈思想現象〉 国「思想上の現象」,岩「思考上の現象」,平角新河外中「思想現象」,青「思惟の現象」

(84) 〈這種〉 国岩青新河外「このような」,平「この」,角「こういう」,中「こうした」

(85) 〈這類〉 国岩青新河外中「こうした」,平角「このような」

(86) 〈形態〉

(87) 〈差別性〉 国岩「ちがひ」,平「区別」,青角「性質のちがひ」,新河外「差異性」,中「性質の相違」

(88) 〈任何〉 国岩青新河「どのような」,平角外中「どんな」

(89) 〈最普通的〉 国青新河外中「普通な(の)」,岩角「一般的な」,平訳さず,岩角は岩波文庫訳『哲学ノート』(2分冊198ページ)によったのであろう。

(90) 〈最基本的〉 国青新河外中「根本的な」,岩平角「基本(的な)」,〈基本〉を「根本」としたのでは〈根本〉と区別できなくなる。

(91) 〈最常見的〉 国新河外「大量にみられる」,岩平青角「大量的(な)」,中「ありふれた」,「大量」という訳語は前掲『哲学ノート』によるのであろう。

(92) 〈最平常的〉 国平青角新河外中「日常的(な)」,岩「普通な」,岩は前掲『哲学ノート』によるのであろう。

(93) 〈学会〉 国青「まなば」,岩「学びとら」,平「体得す」,角中「会得し」,新河外「身につけ」

(94) 〈一切〉 国岩平青角「すべての」,新河外中「あらゆる」

(95) 〈每一〉 国青中「それぞれの」,岩角「すべての」,平「どの」,新河外「一つひとつの・一つ一つの」

(96) 〈現在〉 国青「こんどは」,岩角新河外「これから」,平「これより」,中「次に」,さすがにこの〈現在〉の訳は正しい。

(97) 〈情形〉 国青「角度」,岩新河外中「状況」,平「状態」,角「情況」

(98) 〈各種物質運動形式〉 國「いろいろな物質の」、岩青新河外中「物質のさまざまな」、平「種々の物質の」、角「物質の種々の」

(99) 〈物質の每一种運動形式〉 國新河外「物質の一つ一つ(ひとつ)の」、岩青中「物質のそれぞれの」、平「物質のどの」、角「物質の運動形態のひとつひとつ」

(100) 〈各種〉 國岩新河外中「さまざまな」、平角「種々な」、青「あらゆる」

(101) 〈特殊点〉

(102) 〈質的區別〉 國岩新河「質的(な)區別」、平角「質的區別」、青「質的差異」、外「質的なちがい」、中「質的な相違」

(103) 〈任何〉 國青「どの」、岩「あらゆる」、平角新河外「いかなる」、中「どんな」

(104) 〈這種〉 角を除きすべて「この」、角は「こういう」

(105) 〈諸種〉 國岩角新河外中「さまざまな」、平「種々な」、青「あらゆる」

(106) 〈発声・発光・発熱・電流〉 既訳は「音・光・熱・電流」

(107) 〈所有這些物質の運動形式〉 國「物質のあらゆるこれらの」、岩新河「これら(の)物質のあらゆる」、平「これら物質の運動形態はことごとく」、青「物質のすべてのこれらの」、角「あらゆるこうした物質の」、外「これら物質の」、中「これら物質の運動形態はすべて」

(108) 〈每一物質の運動形式〉 國「それぞれの物質の」、岩「物質のあらゆる」、平青「どの物質の」、角「物質の運動形態のひとつひとつ」、新河外中「物質のそれぞれの」

(109) 〈這種情形〉 國「このような事情」、岩「このような事態」、平「このような状態」、青「このような情況」、角「こういう情況」、新河外中「このような状況」

(110) 〈每一种〉 國「それぞれの」、岩「あらゆる」、平青「どの」、角「~のひとつひとつ」、新河外「一つ一つ(ひとつ)の」、中「~はいずれも」

(111) 〈社会形式和思想形式〉

(112) 〈某一〉

(113) 〈某一种〉

(114) 〈某一門〉

(115) 〈一事物〉

(116) 〈他事物〉

(117) 〈人類認識運動的秩序〉 國「人類の認識がすすんでゆく順序」、岩青角新河外中「人類の認識(の)運動の順序」、平「人類が運動を認識する順序」

(118) 〈諸種〉 國青角「いろいろの」、岩新河外中「さまざまな」、平「多様な」

(119) 〈各種〉 國青「いろいろの」、岩新河外中「さまざまな」、平角「種々の」

(120) 〈科学的方法〉 角を除き「科学的方法」、角は「科学の方法」

(121) 〈各別〉 國岩青角「それぞれの」、平「個別的」、新河外中「さまざまな」

(122) 〈諸種〉 國青角「いろいろの(な)」、岩中「さまざまな」、平「種々な」新河外「それぞれの」

(123) 〈每一個大系統的物質運動形式的特殊的矛盾性〉 國平「それぞれ(の大きな)体系をなす物質の」、岩「物質の諸運動形態のそれぞれの大きな体系の」、青「物質の運動諸形態のそれぞれの大きな体系における」角「ひとつひとつの大きな体系をなす物質の」、新河外「物質の一つひとつ(一つ)の大きな体系をなす(としての)運動形態」、中「大きな体系としての物質の運動形態がそれぞれにもつ」

(124) 〈每一個物質運動形式〉 國平「それぞれの物質の」、岩青中「物質のそれぞれの」、角「ひとつひとつの物質の」、新河外「物質の一つひとつ(一つ)の」

(125) 〈發展長途〉

(126) 〈過程〉

(127) 〈一切〉 國岩平青角中「すべての」、新河外「あらゆる」

(128) 〈每一個〉 國青中「それぞれの」、岩「諸」、平訳さず、角新河外「ひとつひとつの・一つひとつの・一つ一つの」

(129) 〈實在的非臆造的〉

(130) 平角中は6文、他は1文

(131) 〈諸種〉 國岩角新河外中「さまざまな」、平「種々の」、青「このような」

(132) 〈事情〉 平を除きすべて「こと」、平は「もの」

(133) 國青外中3文、岩4文、平角5文、新河2文

(134) 〈總体〉

(135) 〈相互聯絡〉

(136) 〈各方面〉

(137) 既訳はすべて3文

(138) 〈各被压迫階級〉 國青「それぞれの被压迫階級」

級, 岩「圧迫された諸階級」, 平角「被圧迫諸階級」, 新河外中「被抑圧諸階級」

(139) <各個反動的統治集団> 国新河外中「それぞれの反動的(な)支配者集団」, 岩「反動的な支配者の諸集団」, 平角「反動的諸支配集団」, 青「あらゆる反動的な支配者集団」

(140) <各各> すべて「それぞれ」

(141) <每一> 国角新河外「一つ一つの・一つひとつの・ひとつひとつの」, 岩青「それぞれの」, 平「一つの」, 中「個々の」

(142) <各個> 国平青新河外中「それぞれの」, 岩角「諸」

(143) <総体>

(144) <相互聯結> 国岩青新河外中「相互の結びつき」, 平角「相互結合」

(145) <各個> 角を除き「それぞれの」, 角は「諸」

(146) <每一> 国新河外「一つ一つの・一つひとつの」, 岩「各」, 平「どちらの」, 青角「それぞれの」, 中「個々の」

(147) <各> 国岩平青「それぞれ」, 角「ひとつひとつ」, 新河外中訳さず。

(148) <事情> 国青「事柄」, 角外「こと」, 岩平新河中訳さず。

(149) <任何> 国岩青「なんらかの」, 平角「いかなる」, 新河外「どんな」, 中訳さず。

(150) <極壞の作風> 国青「非常にわるい活動形態」, 岩中「きわめて悪い作風」, 平「よくない傾向」, 角「きわめてよくない傾向」, 新河外「非常にわるい作風」

(151) <主観性・片面性和表面的> 中を除きすべて「主観性・一面性・表面的」, 中は「主観的・一面的・表面的」

(152) <唯物論的観点> 国青「唯物論の見方」, 岩「唯物論の見地」, 平「唯物論の立場」, 角「唯物論の見かた」, 新河外「唯物論的観点」, 中「唯物論的観点」

(153) <各方> 国青中「それぞれの側面」, 岩平新河外「各側面」, 角「諸側面」

(154) <全体>

(155) <片面性> 中を除き「一面性」, 中は「一面的であること」

(156) <全面性>

(157) <形相>

(158) <主観的・片面的和表面的>

(159) <片面地域表面地>

(160) <這種> 国岩青新河外「このような」, 平角「この」, 中「こうした」

(161) <是主観主義的> 国岩青新河外「主観主義的」, 平角中「主観主義」

(162) 国岩青新河 2 文, 平角外中 3 文

(163) <相互聯結> 国岩平「相互(の)関連」, 青「相互のつながり」, 角「相互結合」, 新河外中「相互の結びつき」

(164) <根本矛盾>

(165) <情形> 国青「事情」, 岩新河外「状況」, 平「状態」, 角「情況」, 中「様相」

(166) <自由資本> 国平青角「自由資本」, 岩新河外中「非独占資本」

(167) <不平衡> 国岩青角新外中「不均等」, 平河「不均衡」

(168) <状態> 国岩青角新河外「状態」, 平中は訳さず

(169) <情形> 国「諸事情」, 岩新河外中「状況」, 平角訳さず, 青「諸情況」

(170) <領導>

(171) <面貌> 国岩青「相貌」, 平角新河外中「様相」

(172) <調度> 国青「色調」, 岩角「(再)編成」, 平新河外中「配置(がえ)」

(173) 国岩新河外 1 文, 平青角中 2 文

(174) <聯盟> 国青新河外中「同盟体」, 岩角「同盟」, 平「連合体」

(175) <相反>

(176) <種種> 国青「いろいろの」, 岩平角新河外中「さまざまな」

(177) <種種> 国青「いろいろの」, 岩角新河外中「さまざまな」, 平「多様」

(178) <種種>

(179) <何種> 国岩青新河中「どのような」, 平「いかなる」, 角「どういう」, 外「どんな」

(180) <主観随意性> 国岩青新河外「主観的(な)任意性」, 平「主観のわがまま」, 角「主観の任意性」, 中「主観的恣意」

(181) <任何> 国青「いずれの」, 岩角外中「どんな」, 平河「いかなる」, 新「どのような」

(182) <這種> 国岩青新河外中「このような」, 平角「この」

- (183) 〈社会歴史過程〉 国岩青角新外中「社会の歴史(的)過程」, 平「社会歴史過程」, 河「社会史の過程」
- (184) 〈各種不同〉
- (185) 〈基本矛盾〉 国岩青新河外「基本的矛盾」, 平角中「基本矛盾」
- (186) 〈佔有制的私人性〉 国岩青中「所有の私的性質」, 平角「所有の私的性」, 新河「所有の私的性」, 外「占有の個人性」
- (187) 〈極其廣大〉
- (188) 〈普遍性的東西〉 国岩青中「普遍性であるもの」, 新河外「普遍性であったもの」, 平「普遍的なもの」, 角「普遍的であるもの」
- (189) 〈特殊性〉 国岩青新河外中「特殊性」, 平角「特殊なもの」
- (190) 〈生産社会化〉 国青「生産の社会性」, 岩角新河外中「生産の社会化」, 平「社会化された生産」
- (191) 〈私人佔有制〉 国岩青「所有の私的性質」, 平角新河外中「私的所有制」
- (192) 〈這種〉 中を除きすべて「この」, 中は「こうした」
- (193) 〈一〉
- (194) 〈諸矛盾〉
- (195) 〈不但如此〉
- (196) 〈這種〉 国岩青中「このような」, 平角新河外「この」
- (197) 〈這種〉 国平青角新河外「この」, 岩中「このような」
- (198) 〈主観隨意性〉
- (199) 〈客観的实际運動〉 国青新河外「客観的な实际(の)運動」, 岩角「客観的な現実の運動」, 平「客観的实际運動」, 中「じっさいの客観的運動」
- (200) 〈相互關係〉
- (201) 〈這種〉 国平青「こうした」, 岩新河外中「このような」, 角「こういう」
- (202) 〈主要的矛盾方面〉 既訳はすべて「矛盾の主要な側面」
- (203) 〈情形〉 国青「事柄」, 岩新河外中「状況」, 平「状態」, 角「情況」
- (204) 〈一種〉
- (205) 〈必有一種是……〉
- (206) 〈自由資産階級〉 国「自由主義的ブルジョア階級」, 岩「非独占ブルジョア階級」, 平角「自由ブルジョア階級」, 青「自由主義ブルジョア階級」, 新中「非独占ブルジョア階級」, 河外「非独占ブルジョア階級」
- (207) 〈非主要矛盾〉 平を除きすべて「主要でない矛盾」, 平は「非主要矛盾」
- (208) 〈情況〉 平を除きすべて「状況」, 平は「情勢」
- (209) 〈這種〉 国岩青新河外「このような」, 平「この」, 角「こういう」, 中「こうした」
- (210) 〈這種〉 国岩青新河外「このような」, 平角「この」, 中「その」
- (211) 〈這種〉 国青「こうした」, 岩中「その」, 平角「この」, 新河外「このような」
- (212) 〈情形〉 国「事情」, 岩新河外「状況」, 平「状態」, 青角「情況」, 中訳さず。
- (213) 〈情形〉 青「事情」, 他は(212)と同じ。
- (214) 〈這種時候〉 国岩青新河外中「こうしたばあい(には)」, 平「このさいには」, 角「このばあい」
- (215) 〈情形〉 (212)と同じ。
- (216) 〈這一類〉 国「この種類」, 岩平角中「この部類」, 青外「こうした部類」, 新河「こうしたもの」
- (217) 〈這時〉 国青角中「このとき(には)」, 岩「このようなばあいには」, 平「このさいには」, 新河「このばあい」, 外「こう」
- (218) 〈状態〉
- (219) 〈只有一種主要的矛盾……〉
- (220) 〈由此可知〉
- (221) 〈必定有一種是……〉
- (222) 〈這種〉
- (223) 〈万千的学問家和実行家〉
- (224) 〈這種〉 国岩平角新河「この」, 青中「こうした」, 外「こういう」
- (225) 〈各種〉
- (226) 〈矛盾的諸方面〉 平は「矛盾の諸側面でも」と誤訳している。岩は「諸方面」を「二つの側面」と誤訳している。
- (227) 〈情形〉
- (228) 〈形態〉
- (229) 〈必有一方面是主要的〉
- (230) 〈即所謂矛盾起主導作用〉 国「矛盾において主導的な役割をはたしている」, 岩「矛盾において主導的なはたらきをしている」, 平「矛盾に指導作用をはたらかせる」, 青「矛盾において主導的な役割をはたす」, 角「矛盾が主導的な役わりをはたす」, 新河外

「矛盾のなかで主導的な作用をおこす, 中「矛盾において指導的な働きをする」

角以外は矛盾を実体的にとらえきっていないという意味で不十分である。平は主客転倒である。『アジア経済』45年12月号拙稿においては「矛盾が主導作用をする, その側面」と訳したが, この訳は「当該矛盾をして外界になんらかの作用を起させる側面」と受取られるおそれがあるので表現を若干改めた。しかしわたくしの基本的な主張に変わりはない。

(231) 〈這種情形〉

(232) 〈形式〉

(233) 〈東西〉

(234) 〈由此可見〉

(235) 〈取得〉 國「しめる, 岩青新河外「しめている」, 平角「獲得した」, 中「占めた」

(236) 〈封建社会時代〉 既訳はすべて「封建主義社会(の)時代」

(237) 〈力量〉 角を除きすべて「勢力」, 角は「力」, (248) (250)と比較せよ。

(238) 〈資本主義社会時代〉 既訳はすべて「資本主義社会の時代」

(239) 國平青新外 1文, 岩角河中 2文

(240) 〈形成半植民地這種矛盾〉 國「半植民地というこの矛盾を形成する」, 誤訳, 岩「中国を半植民地としている矛盾」, 訳しすぎ, 平青角「半植民地(の)形成という矛盾」, 新河「中国を半植地にするという(この)矛盾」, 訳しすぎ, 外「半植民地を形成しているという矛盾」, 中「(中国を)半植民地化するという矛盾」

(241) 〈事情〉 國岩「事態」, 平訳さず, 青「情況」, 角「こと」, 新河外「ものごと」, 中「情勢」

(242) 國岩平角中 3文, 青新河外 2文

(244) 〈新的民主的〉 國岩青「新しい民主主義的な」, 平角中「新しい民主主義の」, 新河外「新しい( )民主的な」

(245) 〈事情〉 國「こと」, 岩「ばあい」, 平新河外訳さず, 青「例」, 角「事実」, 中「事態」

(246) 〈清朝帝国〉 國青「滿州族の大清帝国」岩「滿洲族の清帝国」, 平「滿清帝国」, 角新河外「清朝帝国」, 中「大清帝国」

角以降訳語が変化しているのは原文の変更による。平までの原文は〈滿清帝国〉であった。

(247) 〈勢力〉 すべて「勢力」

(248) 〈力量〉 國岩平青角中「勢力」, 新河「力」, 外「もの」

(249) 〈称雄一時〉 國青「一度は覇をとらえたことのある」, 岩「勢力をふるっていた」, 平「さしもの」, 角「世にきこえたあの」, 新河外「一時権勢をほこった」, 中「一時勇壯を誇った」

(250) 〈力量〉 國岩平青角中「勢力」, 新河外「力」

(251) 〈相反〉 國「これとは反対の」, 岩河外「それと(は)逆の」, 平角中「逆の」, 青「これとは逆の」, 新「正反対の」

(252) 〈革命党人〉 國岩青「革命政党の黨員」, 平角新河外中「革命黨員」

(253) 〈情形〉

(254) 〈情況〉

(255) 〈情形〉

(256) 〈由不知到知〉 國青「知らない状態から知った状態にたつするまでの」, 岩「無知識から知識へ進むにあたっての」, 平角外中「無知から知への」, 新河「知らない状態から知る状態へすすむまでの」

(257) 〈事情〉 國岩青角中外「こと」, 平訳さず, 新河「事から」

(258) 〈物質的東西〉

(259) 〈精神的東西〉

(260) 〈情形〉 國青新河「事柄」, 岩外中「狀況」, 平「状態」, 角「情況」

(261) 〈情況〉 國平「状態」, 岩青角新河外中「狀況」

(262) 〈差別性〉 國岩平青角中「差別性」, 新河外「差異性」

(263) 〈差別性〉

(264) 〈不平衡性〉 國岩平青角「不均等性」, 新河中「不均衡性」, 外「不平衡性」

(265) 〈平衡〉 國岩平青角新中「均等」, 河「均衡」, 外「平衡」

(266) 〈平衡論〉 國岩青河外中「平衡論」, 角新「均等論」

(264)~(266)において〈平衡〉に一貫した訳語を与えたのは, 平角外だけである。

(267) 〈均衡論〉 すべて「均衡論」

(268) 〈狀況〉 國平青新河外「状態」, 岩角中「狀況」

(269) 〈各種〉 平を除き「さまざまな」, 平は「種々」

- (270) 〈不平衡〉 国岩平青角「不均等」,新河中「不均衡」,外「不平衡」
- (271) 〈主要的矛盾方面〉 既訳は「矛盾の主要な側面」
- (272) 〈非主要的矛盾方面〉 既訳は「矛盾の主要でない側面」
- (273) 〈矛盾諸方面〉 既訳は「矛盾の諸側面」
- (274) 〈互相滲透・互相貫通・互相依頼(或依存)・互相聯結成互相合作〉
- (275) 〈每一種〉 国岩「それぞれ」,平角「どの」,青「あらゆる」,新河外「一つ一つの」,中「個々の」
- (276) 〈各〉 すべて「それぞれ」,(284)と比較せよ。
- (277) 〈統一体〉
- (278) 国角河3文,岩平青新外中2文
- (279) 〈対立〉 国平「対立物」,岩青「対立したもの」,角「対立」,河外中「対立面」
- (280) 〈是〉
- (281) 〈成爲〉 国平中「なり(る)」,岩青角新河外「ある」
- (282) 〈變成〉 国平中「変わ」,岩青角新河外「なる」
- (283) 〈一切〉 国青新河外「あらゆる」,岩平角中「すべての」
- (284) 〈各〉 国岩平青角「諸」,新河外「それぞれの」,中「各」
- (285) 〈一对〉 国青新「一对」,岩「二つの側面からなる」,平角「一組」,河外中「一つ」
- (286) 〈一对以上〉 国青新「一对以上」,岩「二つ以上」,平角「二組以上」,河外中「一つ以上」
- (287) 〈各対〉 国青「それぞれの対」,岩「それぞれ二つの側面からなる諸」,平角「各組」,新「各対」,河外中「それぞれ」
- (288) 〈如此説来〉
- (289) 〈各〉 国新河外「それぞれの」,岩青中「各」,平角「諸」
- (290) 〈作対〉 国岩青「対をなしている」,平角「組になっている」,新河外「対をなす」,中「対になる」
- (291) 国岩新河外中2文,平角3文,青1文
- (292) 〈不同一性〉 国「差異性」,岩平角新河外中「不同一性」,青「相違性」
- (293) 〈対立〉 国平「対立物」,岩青「対立したもの」,角「対立」,新河外中「対立面」
- (294) 〈情形〉
- (295) 〈第一種〉 すべて「第一の」
- (296) 〈事情〉
- (297) 〈這就是説〉
- (298) 〈你們看〉
- (299) 〈矛盾着的東西〉 中を除き「矛盾するもの」,中「矛盾しあう」
- (300) 〈由此達彼〉
- (301) 〈相反的東西〉
- (302) 〈相成的東西〉
- (303) 〈一切矛盾着的東西〉 国青「矛盾するすべてのもの」,岩平角「すべての矛盾するもの」,新河外「矛盾しているすべてのもの」,中「矛盾するものはすべて」
- (304) 〈客観事物〉 国岩青新河外中「客観的(な)事物」,平角「客観事物」
- (305) 〈馬克思主義的唯物弁証法的宇宙観〉 既訳は「マルクス主義的唯物弁証法的世界観」
- (306) 〈看法〉
- (307) 〈揭露〉
- (308) 〈鬼狐変人の故事〉 国青「鬼狐の類」,岩「亡霊や狐の類」,平角「亡霊やキツネ」,新「亡霊やきつね」,河外「幽霊やキツネ」,中「狐や亡霊」,すべて誤訳,〈鬼狐〉とは〈鬼和狐〉ではなく,「狐」のこと。〈鬼〉は形容詞である。
- (309) 〈矛盾構成的諸方面〉 国岩青新河外中「矛盾を構成する諸側面」,平「矛盾の構成する諸側面」,角「矛盾が構成する諸側面」,角はいいが平は「および腰」,その他は誤訳。原文は〈矛盾構成的〉であって〈構成矛盾的〉ではない。論理的意味にちがいが生ずるわけではないという点で不十分。(230)と比較せよ。
- (310) 〈歴史老路〉 国青外「歴史的なふるい道」,岩平中「歴史の古(い)道」,角新河「ふるい歴史的な道」
- (311) 〈対立〉 国岩平青「対立物」,角「対立」,新河外中「対立面」
- (312) 〈合一〉 国平中「合一」,岩青角新河「均衡」,外「同等作用」
- (313) 〈暫存的〉 国「暫存的」,岩青角新河外「経過的」,平「暫定的」,中「過渡的」
- (314) 〈対立物〉 すべて「対立物」,(311)と比較せよ。
- (315) 〈常住性〉 国外「常住性」,岩「不変性」,平

- 角「安定性」、膏「持続性」、新河中「恒常性」
- (316) <変動性> すべて「変動性」
- (317) <状態> すべて「状態」
- (318) <数量的変化> すべて「量的(な, に)変化」
- (319) <統一物>
- (320) <共勉>
- (321) <同居>
- (322) 国新河外 1 文, 岩平角 2 文, 膏 4 文, 中 3 文
- (323) 国岩膏外中 2 文, 平角 3 文, 新河 1 文
- (324) <結合>
- (325) <相反相成>
- (326) <相反的東西>

- (327) <相対的東西>
- (328) <対抗>
- (329) <一種形式>
- (330) <並存>
- (331) <同居>
- (332) <発火> すべて「発火」、誤訳であろう。
- (333) <這種> 中を除き「この」、中は「こうした」
- (334) <這樣>
- (335) <物質> 以下「もの」と訳す。既訳は「物質」
- (336) <地位> 既訳は「地位」
- (337) <結論> 既訳は「結論」

(調査研究部)

アジア経済研究所刊行

中国の化学工業

神原 周編

乏しい資料をフルに活用し、数回の訪中体験を通してあらゆる角度から今後とるであろう進路の傾向をひきだす  
448頁/¥ 1600

東南アジアの鉱産資源IV—タイ 菌部竜一編

文献解題シリーズ第16集としての本書は、第2次大戦後の文献を対象に要約改編する。掲載文献数は英文27編、和文4編、計31編。  
120頁/¥ 400

標準国際貿易商品分類(SITC, R)

アジア経済研究所統計部訳

国際連合刊行の“Commodity Indexes for the Standard International Trade Classification”の翻訳で、約3万以上にのぼる個別商品名を英和対照の形に編集したものである  
640頁/¥ 2500

パキスタンの企業

山上 達人著

個別企業の特徴を数個の指標で析出、その前提として、全産業を具体的数字に基づいて概観し、産業部門別バランスシートを分析する  
360頁/¥ 1000

国際政治と中国

G クラーク著

—オーストラリア外交から見る 松本 繁一訳

「中国は脅威か」——これまでのところ本書ほど広い視野からこの問題を論じ、包括的、実証的に「中国の侵略性」という神話をうちくだしているものはない。

390頁/¥ 500

アジア経済出版会発売